

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第114集

石堂野 B 遺跡

2003

財団法人愛知県教育サービスセンター

愛 知 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

序

宝飯郡御津町は愛知県東部のほぼ中央に位置し、三河湾に面しています。もともと三河五か湊の一つとして港町から発展したこの町は、三河全体だけでなく、江戸向けの廻船港としても、その役割を果たしてきました。

石堂野B遺跡が位置する御津町周辺では、原始の時代より我々の祖先の生活が営まれてまいりました。このことは、周辺地点で確認されている遺跡、過去の発掘調査結果が物語っています。

御津町広石地区では、このたび愛知県建設部道路建設課によって、県道大塚・国府線が建設されることとなりました。(財)愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターでは、愛知県教育委員会を通じて愛知県建設部からの委託を受け、建設工事に先立つ事前調査を行いました。その結果、古墳時代・古代を中心とした遺構や遺物を検出することができ、この地の歴史に新たな資料を提供できました。

調査にあたりまして、愛知県建設部、愛知県教育委員会、御津町教育委員会をはじめとする関係諸機関、周辺地域のみなさまから多大なご協力をいただきましたことを、深く感謝申し上げる次第です。

最後に本書がこの地域の歴史理解と、埋蔵文化財研究の一助となれば幸いと存じます。

平成15年8月31日

財団法人 愛知県教育サービスセンター

理事長 井上 銀治

例 言

- 1 本書は愛知県宝飯郡御津町大字広石に所在する、石堂野B遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、愛知県建設部道路建設課による県道大塚国府線建設工事に伴う事前調査として、財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターが愛知県教育委員会を通じて委託を受けて実施した。調査面積は6600 m²(平成11年度200 m²、平成12年度6400 m²)である。
- 3 発掘調査は平成12年5月から9月にかけて実施した。さらに平成14年度には調査報告書作成のため、整理作業を実施した。
- 4 現地における発掘調査は、愛知県埋蔵文化財センター調査課主査・川井啓介、主任・松田訓、調査研究員・竹内 睦、鈴木 裕、皆見秀久が担当した。
- 5 調査にあたっては、愛知県建設部道路建設課、愛知県教育委員会文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センター、御津町教育委員会をはじめとして、多くの関係諸機関のご協力を得た。
- 6 本書の編集は松田 訓が担当し、執筆分担は以下の通りである。
第Ⅰ～Ⅴ・Ⅶ章＝松田 訓、第Ⅵ章＝(株)パレオ・ラボ
- 7 遺物整理作業については松田 訓が担当し、実測、トレース作業には次の方々の参加を得た。
土倉崇子・神谷已佳（調査研究補助員）、阿辺山孔子、伊藤 恵、妹尾美佐穂、手嶋悦子（整理補助員）
- 8 本書掲載の遺構写真は松田 訓が撮影し、遺物写真は福岡 栄（スタジオピュア）に依頼した。
- 9 本書に示す座標数値は、国土交通省告示に定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠し、旧基準「日本測地系」で表記した。また、海拔表記は、東京湾平均海面高度（T.P.）の数値である。
- 10 本書で使用する土色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』による。
- 11 遺物の整理番号と登録番号の対象は、表として添付CDに収録した。
- 12 遺構写真や図面類などの調査記録は、本センターにて保管する。
- 13 出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターにて保管する。
- 14 本書の作成にあたり、城ヶ谷和広氏には出土遺物の時期的解釈において多くのご指導を得た。さらに本遺跡の報告にあたって、次の諸氏、諸機関にご指導、ご協力をいただいた。記して感謝したい。（五十音順、敬称略）

小笠原久和 尾多賀晴悟 栗原将人 須川勝以 林 弘之 山崎純男
御津町教育委員会

目次

第Ⅰ章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯	1
-------------	---

第2節 調査の経過	1
-----------	---

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置	2
-----------	---

第2節 歴史的環境	4
-----------	---

第Ⅲ章 調査の概要

第Ⅳ章 遺構

第1節 基本層序	7
----------	---

第2節 遺構	9
--------	---

第Ⅴ章 遺物

第1節 概要	25
--------	----

第2節 主要遺構別出土遺物	25
---------------	----

第Ⅵ章 自然科学的分析

第1節 放射性炭素年代測定	38
---------------	----

第2節 炭化材樹種同定	39
-------------	----

第Ⅶ章 まとめ

挿図目次

第1図	遺跡位置図-----	2
第2図	遺跡周辺地形-----	3
第3図	周辺遺跡分布図-----	5
第4図	調査区配置図-----	6
第5図	調査区基本層序概念図-----	7
第6図	調査区壁土層断面図-----	8
第7図	A区全体図-----	10
第8図	B・C区全体図-----	11
第9図	S B 004 平・断面図-----	16
第10図	S X 1001 平・断面図-----	16
第11図	S B 801・802 平・断面図-----	17
第12図	S X 819～822 平面図 S X 819・822 断面図-----	18
第13図	S B 002 周辺平・断面図-----	19
第14図	S D 801・S X 801 平・断面図--	20
第15図	S D 805・S X 816 平面図 S D 805 断面図-----	21
第16図	S B 003・S K 685 平・断面図--	22
第17図	S K 090 平・立面図-----	22
第18図	S K 430 平・立面図-----	22
第19図	S B 005 平面図-----	23
第20図	S B 006 平面図-----	23
第21図	S B 001 平・断面図-----	24
第22図	S K 067 平・断面図-----	24
第23図	S X 001 平・立面図-----	24
第24図	出土遺物実測図(1)-----	29
第25図	出土遺物実測図(2)-----	30
第26図	出土遺物実測図(3)-----	31
第27図	出土遺物実測図(4)-----	32
第28図	出土遺物実測図(5)-----	33
第29図	出土遺物実測図(6)-----	34
第30図	出土遺物実測図(7)-----	35
第31図	出土遺物実測図(8)-----	36
第32図	出土遺物実測図(9)-----	37
第33図	樹種顕微鏡写真(1)-----	43
第34図	樹種顕微鏡写真(2)-----	44
第35図	樹種顕微鏡写真(3)-----	45
第36図	変遷概念図-----	48

表目次

第1表	調査工程-----	1
第2表	放射性炭素年代測定および 暦年代較正の結果-----	38
第3表	S X 001 出土炭化材の樹種-----	42

第Ⅰ章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

石堂野B遺跡は、愛知県宝飯郡御津町大字広石地内に位置する。愛知県教育委員会が1990年に発行した愛知県遺跡分布地図の東三河地区版によると、大字広石及び隣接の豊沢地区には高坂遺跡、石堂野遺跡などが記載され、このほかに愛知県指定有形文化財・広石銅鐸の出土した広石遺跡や、御津町指定史跡の船山古墳、穴観音古墳などが記載されている。この地区は現在、山林、耕作地が広がる中に民家がならび、石堂野B遺跡の所在する地点は、近年まで遺跡としては範囲指定されていなかった。

平成11年、県道大塚・国府線建設に伴い、予定地が遺跡等に近接することから、まず初めに広石散布地範囲確認調査として合計200m²の試掘調査が行われ、古墳時代、古代を中心とした遺跡の存在が確認された。この範囲確認地点は、昭和60年度に本センターが調査を行った石堂野遺跡から、同一の舌状台地を約300m下った位置にある。ここで確認された遺物は、今回の調査成果と時期的に整合性をもつため、一連の遺跡と考えることも可能であるが、調査地点間が同一の文化面をもって繋がるとは断定できなかったため、遺跡名は石堂野B遺跡として調査することとした。

財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターでは、愛知県教育委員会を通じて愛知県建設部からの委託を受け、平成12年5月より、発掘調査を実施した。調査面積は、6400m²である。

第2節 調査の経過

調査区は県道建設予定地を、A～C区の3分割にして設定した。平成12年5月8日より表土剥ぎを実施し、資材搬入を行って発掘作業を開始したのは5月14日であった。調査期間は約4ヶ月を要し、この間、9月24日には発掘調査成果の普及、公開を目的として現地説明会を開催し、多くの見学者の参加を得た。

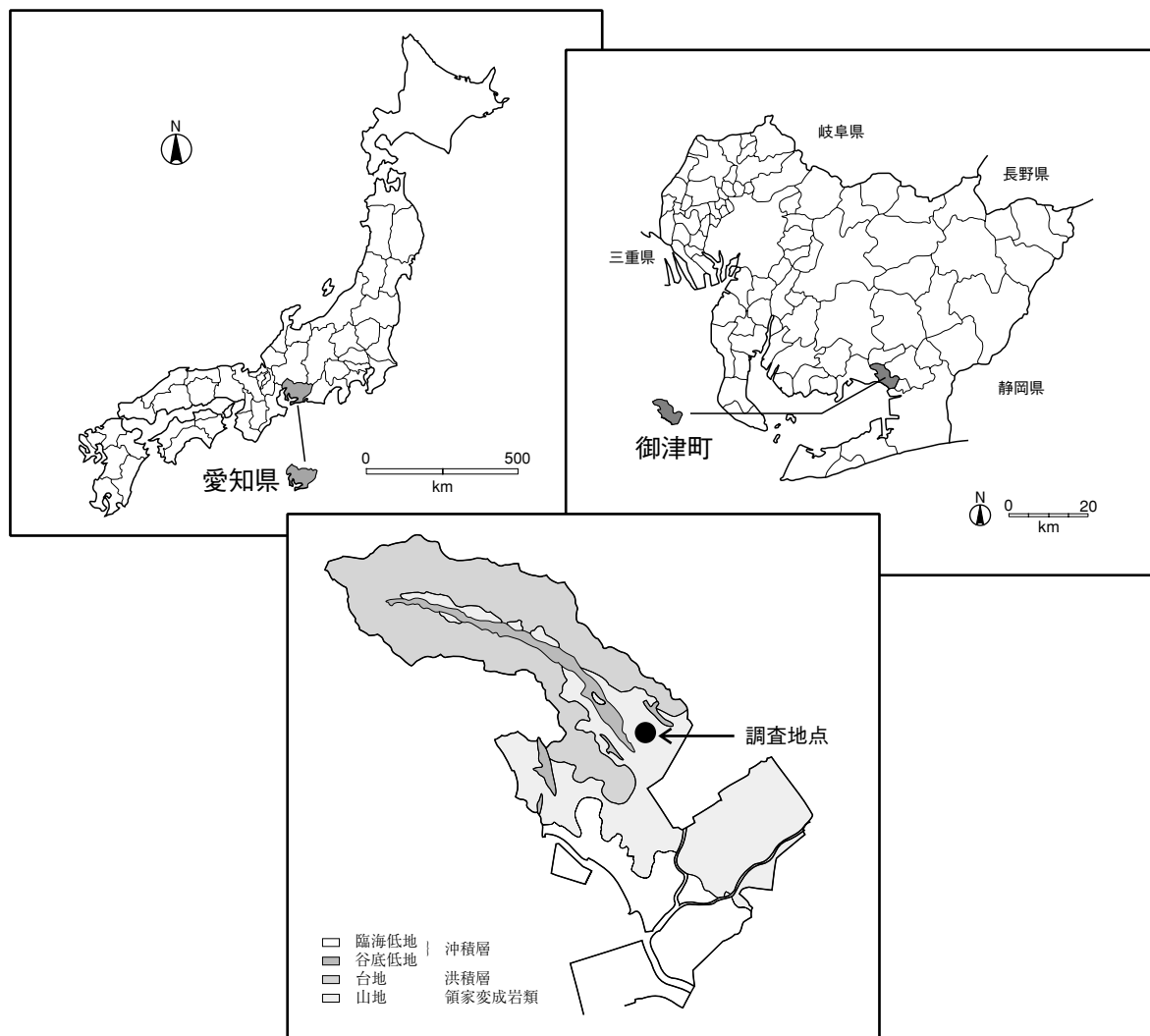
出土遺物の整理作業は、調査終了後、洗浄・注記作業を行い、引き続き平成14年10月より、調査報告書作成までの作業を行った。

第1表 調査工程

	H.12 4	5	6	7	8	9	…	H.14 9	10	11	12	H.15 1	2	3
作業員説明会	・													
資材搬入														
A 区														
B・C 区														
航空測量				・		・								
現地説明会						・								
資材搬出														
報告書作成														

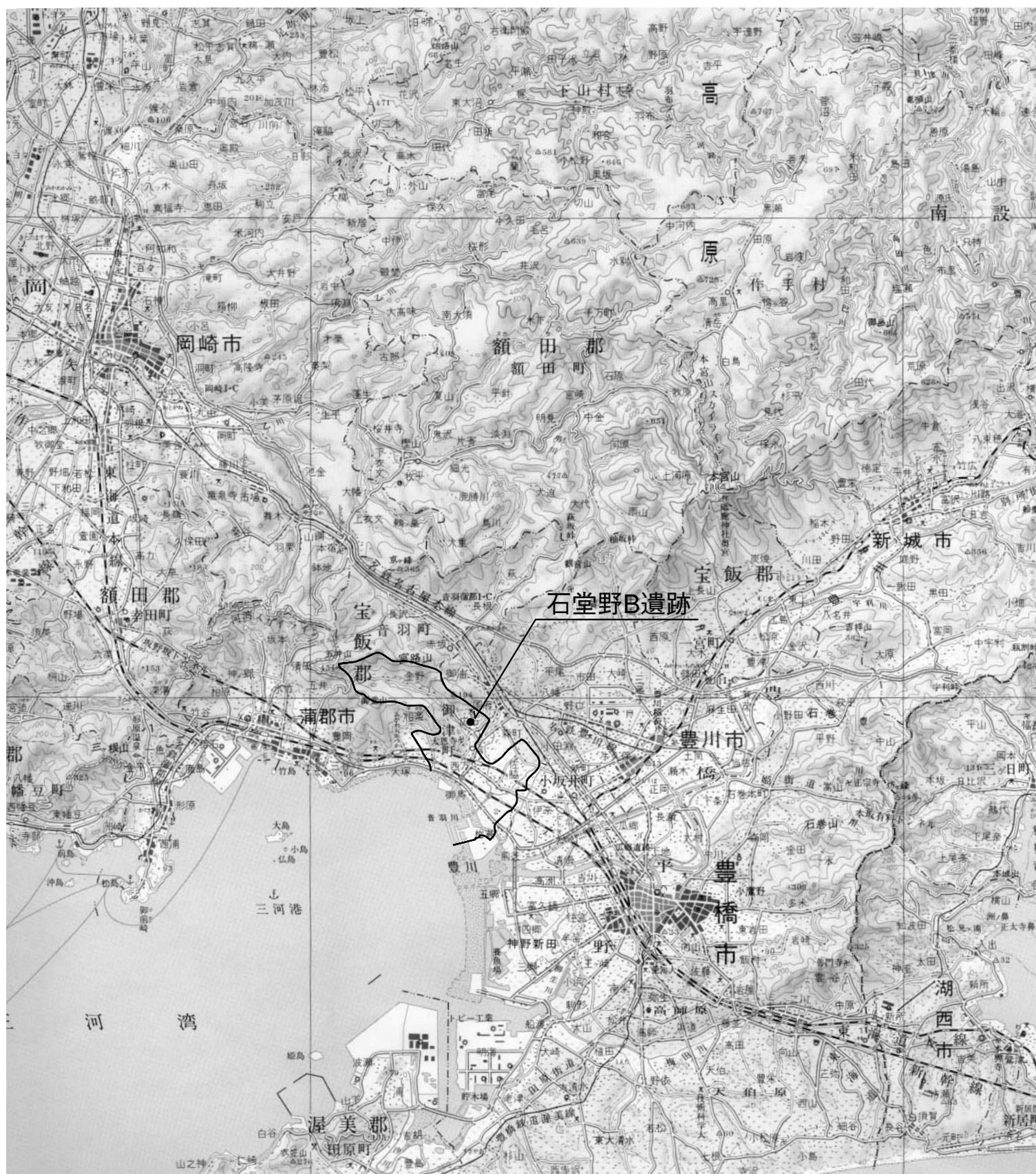
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置



第1図 遺跡位置図

愛知県は日本列島のほぼ中央、太平洋側に位置し、旧国名では尾張と三河にあたる。石堂野B遺跡の位置する宝飯郡御津町は、愛知県東部を占める三河地域のほぼ中央やや東側に位置し、三河湾のもっとも奥の一角に位置する。町域は音羽町と北で、豊川市、小坂井町、豊橋市とは東で、蒲郡市とは西で接する。中央構造線の内帯に位置し、宝飯山地とこれに続く台地、河岸段丘、扇状地によって構成され、南部の三河湾側は臨海低地が展開する。調査地点は、J R東海道線愛知御津駅から北西方向約2 kmの地点に位置する。調査地は、北西から南東方向に向かってゆるやかに下る舌状の高まりと、小河川によって開削された浅い谷によって形成されている。旧態は畑地・果樹園で、標高は、約28～32 mを測る。



第2図 遺跡周辺地形図（国土地理院 1/20 万地勢図「豊橋」）

第2節 歴史的環境

石堂野B遺跡は、弥生時代末から古墳時代初頭の集落跡、円筒埴輪片の出土した溝、古代・中近世の遺構・遺物なども確認されている複合遺跡であるが、出土遺物は古式土師器を主体とする。

『愛知県遺跡分布地図（Ⅲ）東三河地区』によれば、御津町内に分布する埋蔵文化財包蔵地は33ヶ所が確認されている。本節では、周辺に分布する遺跡のなかで、石堂野B遺跡が位置する御津町・豊川市境周辺を中心に概観してみる。

石堂野B遺跡周辺で確認できる遺跡は、南東方向約2.5 kmの位置に、縄文晩期から弥生時代後期にかけての遺物が認められた河原田遺跡がある。

弥生時代では、南に約2.5 kmの位置に、弥生時代中期の標識遺跡にもなっている長床遺跡がある。調査地点から北東に約300mの位置には扁平鈕式の流水紋が施された広石銅鐸（県指定文化財）出土地がある。東方1.5 kmには後期の遺物が確認された国府高校遺跡（豊川市）、さらにその東側200mの位置には、同時期の坊入遺跡（豊川市）がある。調査地点から谷を隔てた北東斜面には、弥生時代後期から古墳時代初頭の遺物を主体とした高坂遺跡がある。

古墳時代では、調査地点から北東方向に約800mの位置には、中期の大入山1号墳（豊川市）がある。同時期のものとして、さらに北東方向に約1.8 kmの位置には、全長96mの前方後円墳である船山第1号墳（豊川市）がある。後期のものとしては、調査地点から南東方向に約700mの位置に、全長37mの前方後円墳である船山古墳がある。調査地点から北西方向に約500mの位置には、全長16mの円墳である穴観音古墳がある。

律令期にはいと、旧三河国の中心施設はこの地域に設けられることとなる。調査地点から北東方向に2 kmの白鳥台地上には三河国府推定地が所在し、この国府域と思われる推定地北側には、古代の遺構・遺物が多く確認された白鳥遺跡がある。この白鳥台地のさらに北東1 kmの八幡台地上には、三河国分寺、三河国分尼寺跡がある。また、国分寺跡のすぐ北側には、国分寺に直接関連すると思われる遺構が多数確認された国分寺北遺跡があり、白鳥・八幡台地上が旧三河国の中心地点として機能していたことがうかがえる。この舌状にのびる両台地間は谷地形となっているが、この地点には三河国府と国分寺・国分尼寺を結んでいたと推定される道路跡が、上ノ蔵遺跡にて確認されている。この地域の南側一帯には、為当条里として著名な条里遺構が良好に遺存している。

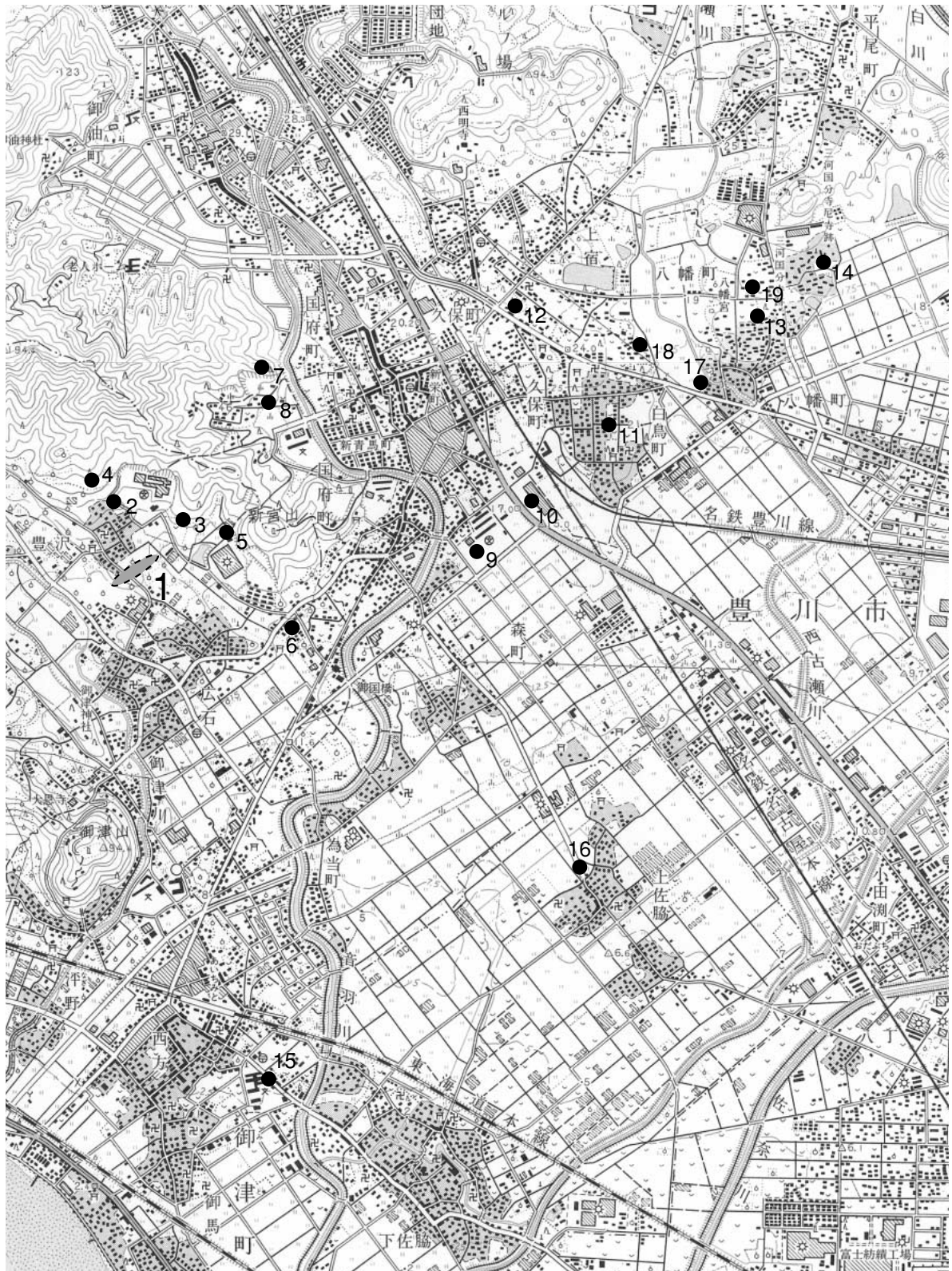
中世に至り律令制支配が崩壊すると、この地域は「御津庄」の名が散見するように、荘園化されたようである。やがて戦国期を迎えると、西に勢力を拡大したい駿河の今川氏と、これを阻みたい尾張・三河の国衆、領主層などの間で、抗争が繰り返される地帯となってゆく。

近世において徳川幕府による安定支配が続くと、幕府の街道整備による宿場町の発展、代官の三河五か湊選定による港町の発展がみられ、現勢の基礎が築かれてゆく。

参考文献

豊川市史編纂委員会編 1973 『豊川市史』

御津町町史編さん委員会編 1990 『御津町史』



- | | | | | |
|-------------|------------|------------|-------------|------------|
| 1. 石堂野B遺跡 | 2. 石堂野遺跡 | 3. 高坂遺跡 | 4. 穴観音古墳 | 5. 広石銅鐸出土地 |
| 6. 船山古墳 | 7. 大入山第1号墳 | 8. 山ノ入遺跡 | 9. 国府高等学校遺跡 | 10. 坊入遺跡 |
| 11. 三河国府推定地 | 12. 船山第1号墳 | 13. 三河国分寺跡 | 14. 三河国分尼寺跡 | 15. 長床遺跡 |
| 16. 河原田遺跡 | 17. 上ノ蔵遺跡 | 18. 白鳥遺跡 | 19. 国分寺北遺跡 | |

第3図 周辺遺跡分布図 (1:25,000)

第Ⅲ章 調査の概要

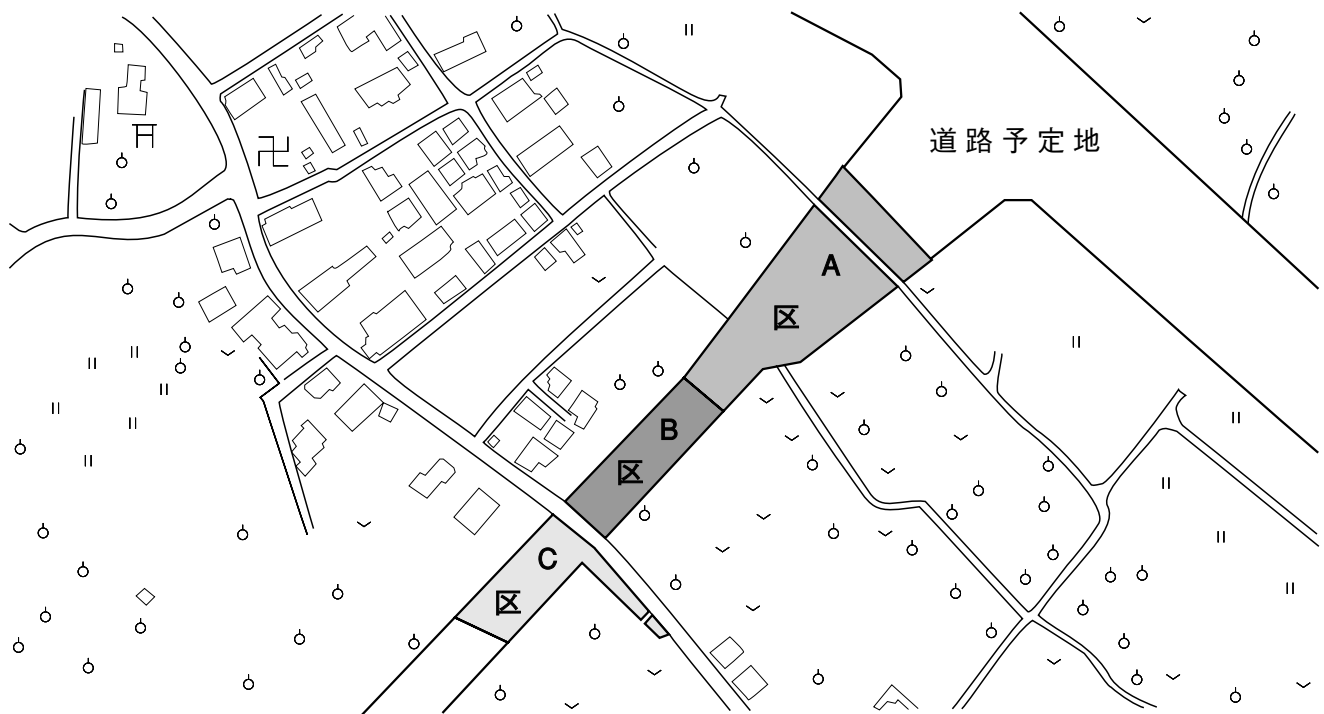
調査区は、県道大塚・国府線建設予定地に設定した。したがって調査区は、建設予定の道路形状に合わせてため細長く、北東から南西方向に向けて3分割し、A・B・C区の順に設定した。

今回の調査地点は、昭和60年度に本センターが発掘調査した石堂野遺跡をはじめ、近隣地点に位置する古墳などから、近似する時期の遺構・遺物が残存している可能性が予想できた。

調査地点は舌状台地上に立地し、今回の地点だけでなく過去の調査事例においても、遺構検出面や深度のある遺構基底部からの湧水は認められなかった。したがって、調査地点の排水除去対象は雨水のみであり、トレンチを排水利用した。

調査区内の表土除去は、機械（バックホウ）掘削によって行った。この調査地に排土処理のためにベルトコンベヤーを配し、A・B区用の排土置き場としてはそれぞれの調査区を交互に排土用地にあて、C区用の排土用地には調査地点の南側を確保し、搬出処理を行った。したがって、調査工程としては、まずA区の調査を行い、これを終了させた後に、B・C区の調査を同時に行った。

各調査区では遺構検出作業に先立ち、明治時代初頭以降の耕作痕が確認されたため、溝を中心とした掘削痕の埋土除去に作業が割かれた。この後、遺構検出作業に入り、写真測量を行い、最終的に基盤層の確認を行って調査を終了した。



第4図 調査区配置図

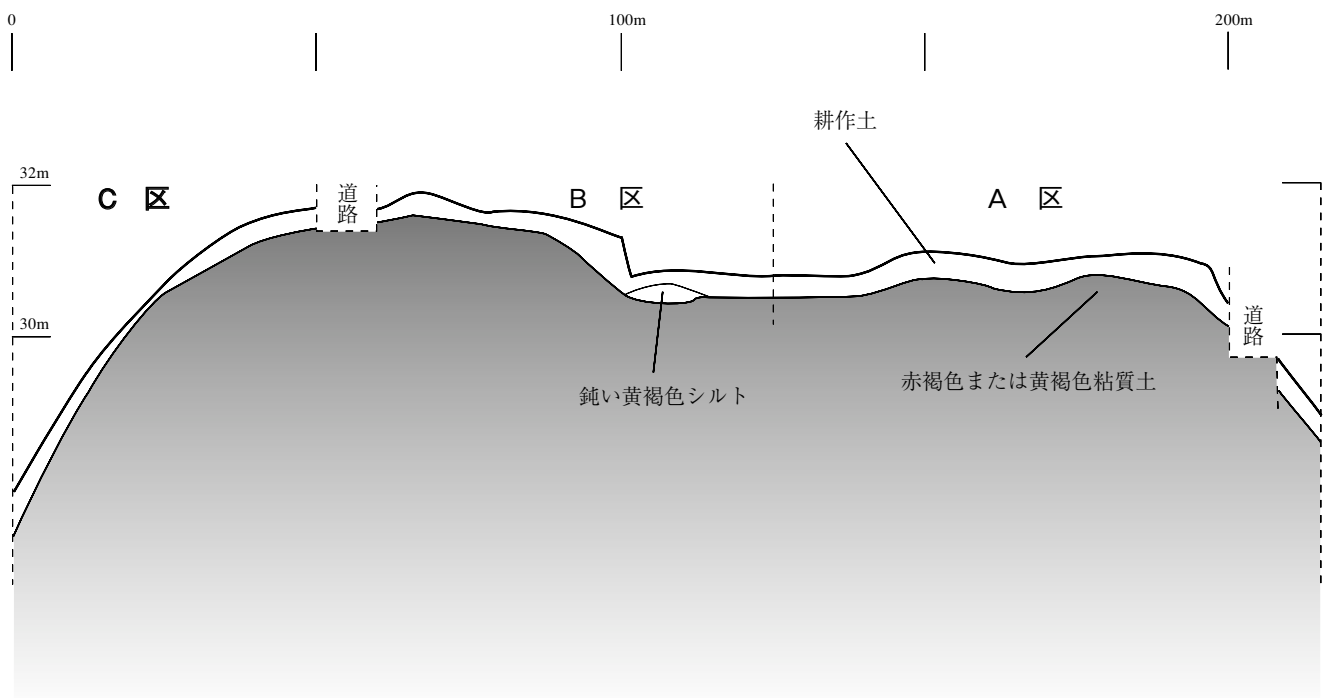
第Ⅳ章 遺構

第1節 基本層序

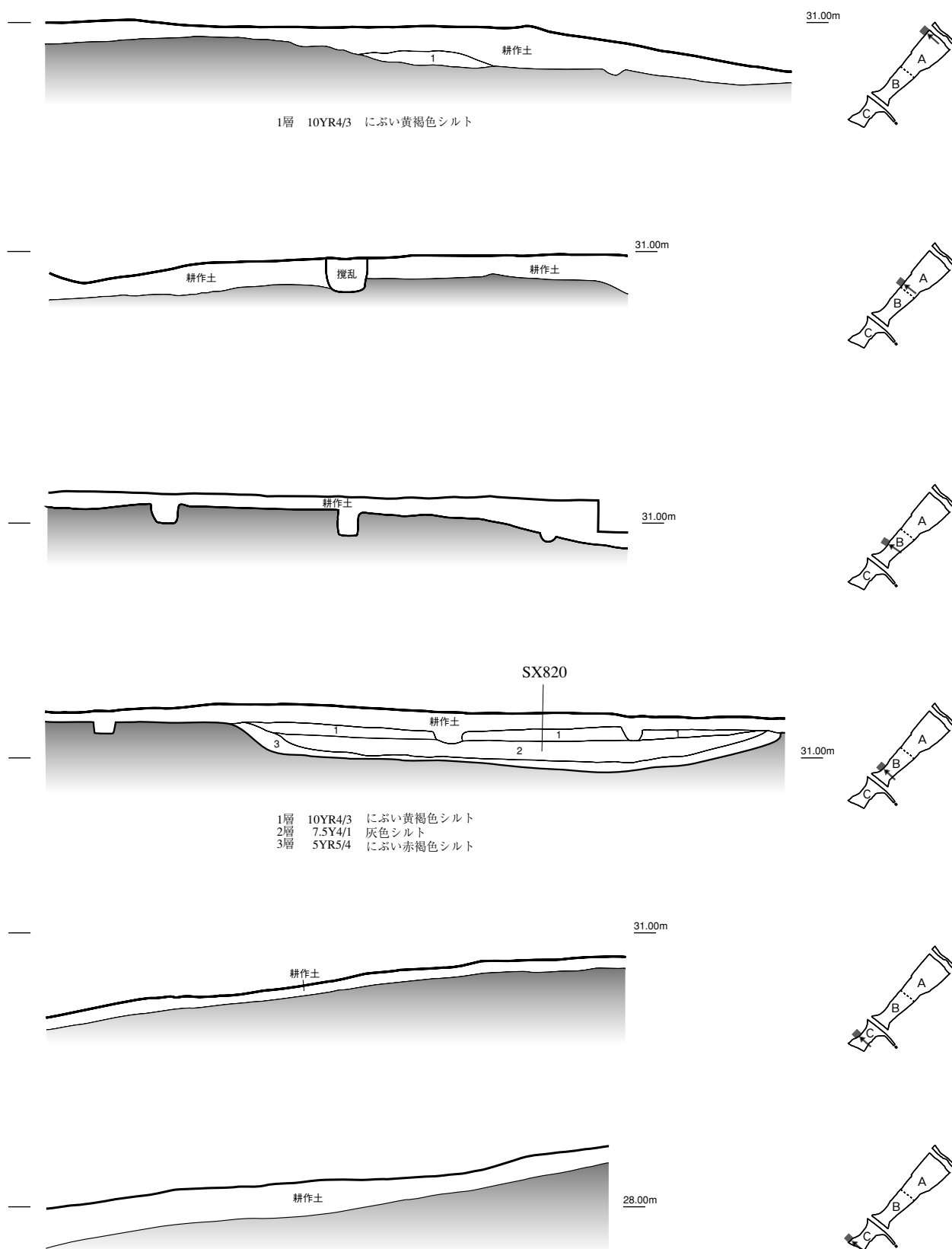
石堂野B遺跡における基本層序を概観すると、第5図のような状況がみてとれる。地表面は標高30m前後で、地表面は耕作土または、客土が敷かれた部分に覆われていた。この直下には各調査区の大部分で、台地の基盤層である赤褐色または黄褐色粘質土が現れた。調査区内のごく一部では、耕作土と基盤層の間にぶい黄褐色シルトが堆積していることが確認できたが、面を成す広がりにはいたっていなかった。また、舌状台地が北西から南東方向を向いてのびているが、このゆるやかな斜面に平坦な耕作地を確保するため、斜面下部を削平して上部に盛り上げており、基盤層のブロックが多量に混じった客土も認められた。

調査区内では近代以降の攪乱が多く認められ、層序の旧態が判断できる部分が少なかった。さらに基盤層自体に起伏があり、何回かの整地行為によって高まりは削平され、窪みは埋められたようであり、安定した面の広がりをもとに土層によって判断しながら追いかけることは困難であった。

このなかで調査地点の平均的堆積状況を概観すると、各調査地点とも地表面を覆う耕作土・客土は基本的に無遺物で、これを除去して現れた面では明確な人為的掘り込みが確認でき、この面である赤褐色または黄褐色粘質土層中には、遺物や人為的掘り込みが確認できなかったため、基盤層として扱った。



第5図 調査区基本層序概念図



第6図 調査区壁土層断面図(1/80)

第2節 遺構

第1項 概要

今回の調査地点で検出した遺構は、主として円または方形土坑、溝、円形小穴、住居跡、火葬墓、土壙墓、方形周溝墓、その他の掘り込みなどであった。これらの遺構は、遺物を伴うものが極端に少なく、時期が判断できたものはわずかであった。この時期を概観すると、弥生時代後期～古墳時代初頭、古墳時代後期、平安時代、中～近世の4時期に大きく区分できる。遺構の時代別比較では、弥生時代後期～古墳時代初頭が主体であり、古墳時代後期、平安時代、中・近世は小規模遺構が中心で数は少ない。こうした状況を北隣の昭和60年度調査地点と比較すると、時代別比較では、弥生時代後期～古墳時代初頭が最も古い時期であることに違いはないが、昭和60年度調査地点（石堂野遺跡）では古代の遺構が最も多く検出された点が異なる。

遺構の内容としては、昭和60年度調査地点では、住居、建物跡が中心で、調査区全体に粗密を問わず確認されている。本調査地点では、A・B区の境界付近で数基の竪穴住居状の掘り込みが確認できたが、検出遺構の主体を成すものとはほど遠く、調査区全体の中では限定されよう。

遺物が一定量検出されたのは、住居跡と思われる掘り込みの埋土からが最も多かった。しかし、本調査地点においては、検出した遺構数に比して遺物を伴って出土したものがほとんどみられなかった。したがって、遺物の出土量においても面積比で考えると、昭和60年度調査地点に比べて相対的にかなり少なかった。

遺構検出面は、概ね27.9～31.9 mである。この検出面は、基本層序の説明でも述べたが削平された部分かなり含まれていた。調査は客土を取り除いた面での検出を行い、時期の異なる遺構を同一面として遺構検出を行っており、時期別生活面としては捉えられなかった。

第2項 弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構

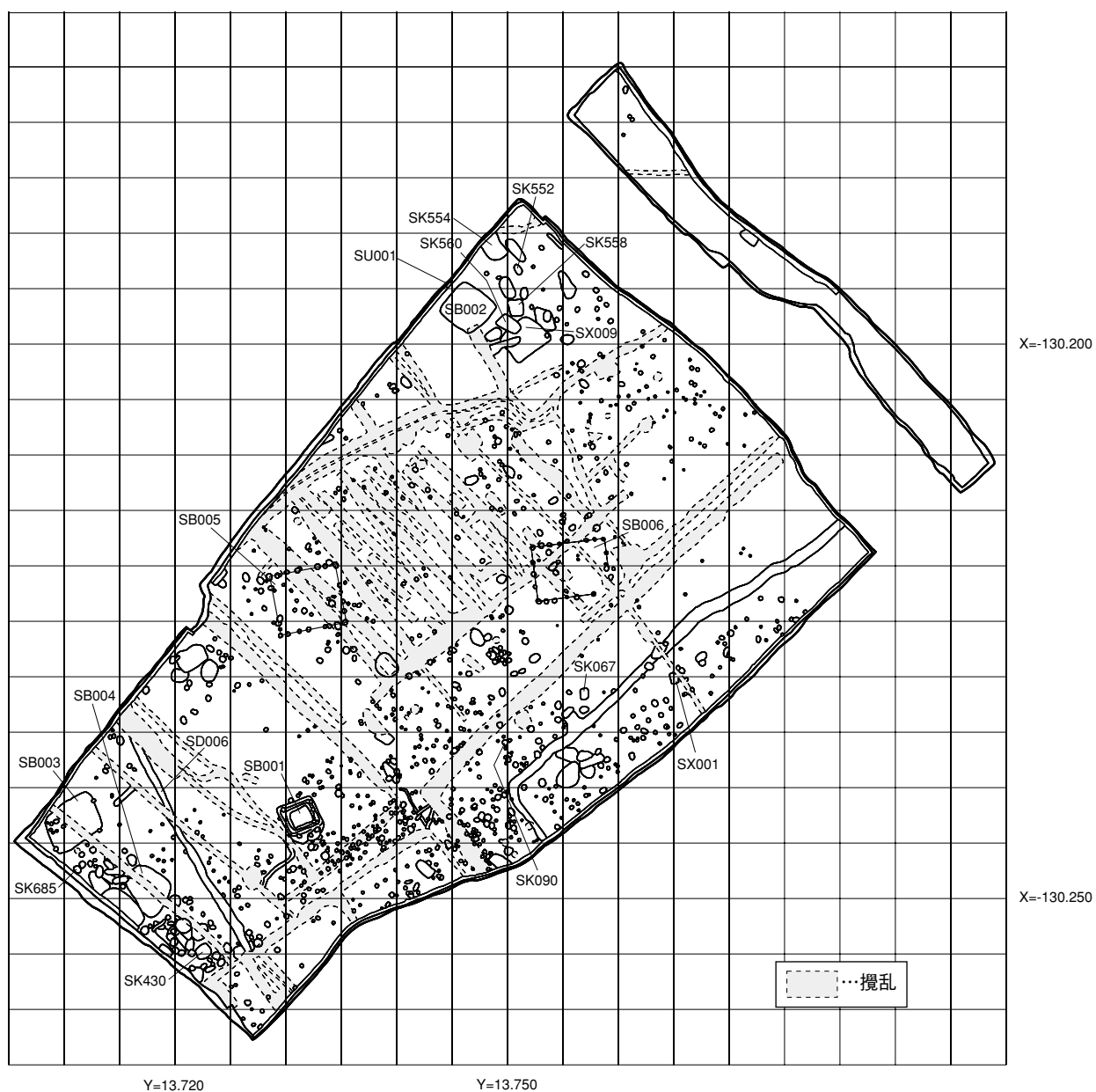
今回の調査地点で弥生時代後期～古墳時代初頭の遺物を伴う遺構は、竪穴住居、土坑、方形周溝墓等である。このうち掘削規模においては方形周溝墓が大きく、住居跡を除くその他の遺構ともども、遺物の出土量は極端に少なかった。遺構埋土における有機化の進み具合で、土色などの判断から古墳時代以前の遺構と思われる掘り込みにおいても、遺物が伴うものはほとんどみられなかった。この時期の堆積層は、基本層序の項で扱ったにぶい黄褐色シルト層とも考えられるが、調査地点内で残存する部分が限られており、この面からの明確な掘り込みと確認できるものがみられなかった。

・竪穴住居

S B 004 A区南西端に位置する。平面形態は不整形を呈し、検出高は30.2 mを測り、長径4.3 m、短径3.6 m、深さ0.3 mを測る。埋土は灰色シルトを基調とし、S K 695・716、S X 014等周辺の遺構すべてに切られている。遺物は、欠山期のものと思われる壺、甕、高杯、小型鉢他がまとまって出土している。

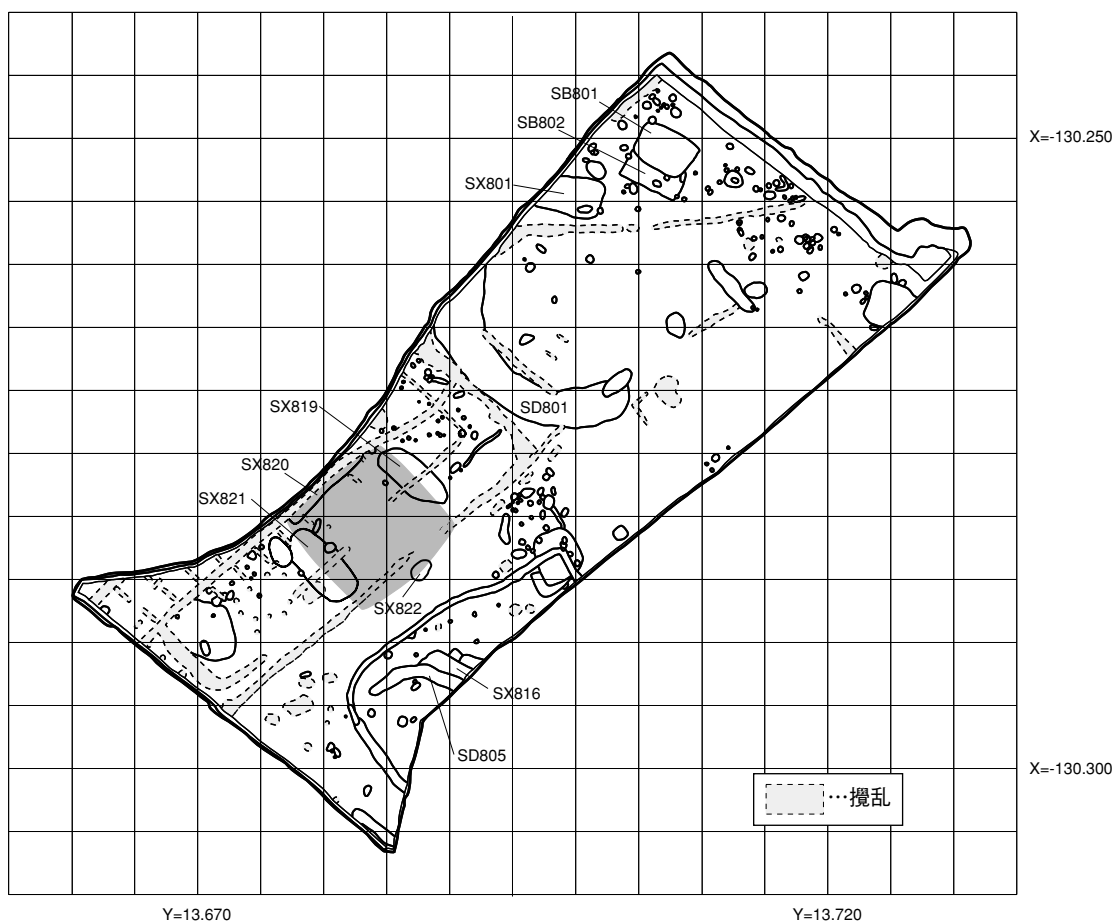
S B 801 B区北東端に位置する。平面形態は不整形を呈し、検出高は30.2 mを測り、長径4.6 m、短径3.1 m、深さ0.3 mを測る。埋土は灰色シルトを基調とし、南西側に並列するS B 802を切ってお

A区

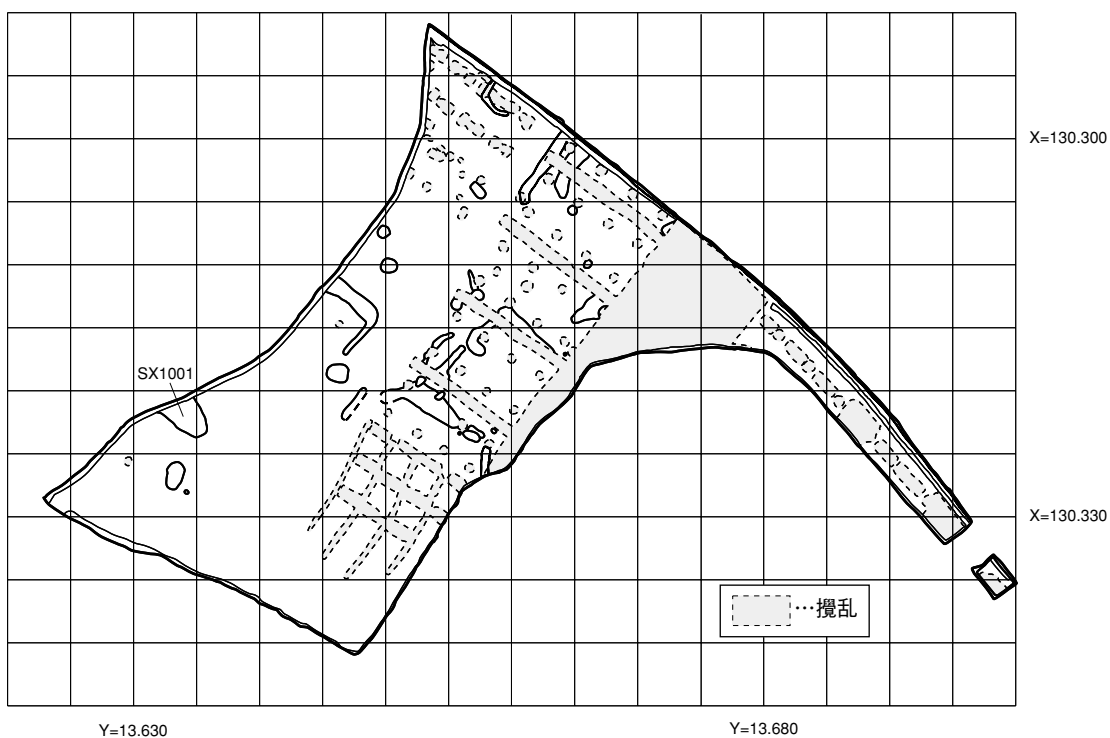


第7图 A区全体图(1/600)

B区



C区



第 8 図 B・C区全体図(1/600)

り、S K 808に切られている。遺物は、欠山期のものと思われる壺、甕、高杯他がまとまって出土している。

S B 802 B区北東端に位置する。平面形態は不整長方形を呈するものと思われ、検出高は30.2 mを測り、長径4.5 m、深さ0.2 mを測る。埋土は灰色シルトを基調とし、北東側に並列するS B 801、南側隅をS K 808に切られている。遺物は、欠山期のものと思われる甕、高杯他が出土している。

・溝状遺構

S X 819～822 B区中央やや西側に位置する。主体部と思われる掘り込みは見つかっておらず、規模が似ている溝状の掘り込みが「コ」の字状に検出された。囲みの空いた側は、水平な耕作地確保のため傾斜が段状に削平されていたが、わずかに溝の基底部が浅穴状に検出された。いずれの掘り込みからも欠山期の土器片が検出されており、この時期に掘削されたものと思われる。調査区端で検出されたS X 820に直交するS X 819・820との交点は、つながらず切れていることが確認できた。これと反対側の2隅は段状に削平されているため、コーナー部の形状が確認できなかった。したがって、四隅が切れるものかどうかは、確認し得ない。S X 819・821の下端内側間の距離は8.3 m、S X 820の下端内側とS X 822の上端内側間は9.5 mを測る。S X 819～822の各形状と位置関係、出土遺物等から、方形周溝墓の可能性のあるものと判断した。

S X 819 4ヶ所の掘り込みでは北東側に位置する。検出長は6.4 m、幅は2.5 m、深さは最深部では0.97 mを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトを基調とし、主軸の方向はN－50°－Wを示す。

S X 820 4ヶ所の掘り込みでは北西側に位置する。検出長は7.6 m、深さは最深部では0.36 mを測る。埋土はにぶい灰色シルトを基調とし、主軸の方向はN－40°－Eを示す。

S X 821 4ヶ所の掘り込みでは南西側に位置する。検出長は6.7 m、幅は3.4 m、深さは最深部では0.56 mを測る。埋土は灰色シルトを基調とし、主軸の方向はN－42°－Wを示す。

S X 822 4ヶ所の掘り込みでは南東側に位置する。残存長は1.9 m、幅は1.2 m、深さは0.05 mを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトを基調とする。

・その他

S X 1001 C区中央の北西側に位置する。平面形態は楕円形または溝状を呈するものと思われ、検出高は29.3 mを測り、残存長3.1 m、深さ0.4 mを測り、埋土は灰色シルトを基調とする。欠山期のものと思われる遺存度の良好な広口壺、パレススタイルの広口壺等が出土しており、儀礼に伴う埋納遺構の可能性も考えられる。

第3項 古墳時代後期の遺構

・竪穴住居

S B 002 A区北端に位置する。平面形態は方形を呈し、検出高は30.5 mを測り、長径4.0 m、短径3.8 m、深さ0.3 mを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトを基調とする。遺物は、土器小片、須恵器片等が出土している。壁溝、柱穴などは明確に検出し得なかったが、規模、平面形態の特徴などから、住居跡の

可能性があると判断した。

S X 009 A区北端に位置する。平面形態は不整形を呈し、検出高は30.3 mを測り、長径3.7 m、短径3.0 m、深さ0.2 mを測る。埋土は灰色シルトを基調とする。遺物は、土器片、須恵器小片等が出土している。S B 002同様、壁溝、柱穴などは明確に検出し得なかったが、規模、平面形態の特徴などから、住居跡の可能性があると判断した。

・土坑

S K 552 A区北端に位置する。平面形態は楕円形を呈し、検出高は30.25 mを測り、長径0.95 m、短径0.6 m、深さ0.2 mを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトを基調とする。遺物は、土器小片が出土している。

S K 558 A区北端に位置する。平面形態は不整形を呈し、検出高は30.3 mを測り、長径1.5 m、短径1.3 m、深さ0.2 mを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトを基調とする。遺物は、須恵器片、土器小片が出土している。

S K 560 A区北端に位置する。平面形態は不整形を呈し、検出高は30.3 mを測り、長径1.5 m、短径2.1 m、深さ1.3 mを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトを基調とする。遺物は、須恵器片、土器小片が出土している。

・溝状遺構

S D 801 B区中央やや北側に位置し、北から南に向かったものが東方向に弧を描いてのびる。検出高は30.9 mを測り、断面形態は船底形を呈するものと思われ、幅3.2 m、検出長約21 m、深さ0.4 mを測る。埋土は灰色シルトを基調とする。遺物は土器片、長頸壺と思われる須恵器片等が出土している。

S X 801 B区北側に位置し、東西方向にのびる。検出高は30.5 mを測り、断面形態は船底形を呈しており、幅3.2 m、検出長5.2 m、深さ0.2 mを測る。主軸の方向はW-10°-Nを示し、埋土はにぶい黄褐色シルトを基調とし、S K 817に切られている。遺物は5 c 後半と考えられる須恵器が出土している。ここにあげたS D 801およびS X 801はともに調査区外にのびているが、弧を描いてつながる同一の溝とも考えられる。出土遺物、規模、方向などから、古墳の周濠の可能性も否定できない。

S D 805 B区南西側に位置し、東西方向で南側に弧を描いてのびる。検出高は30.9 mを測り、検出長は10.0 mで、さらに調査区南東側にのびる。断面形態は船底形を呈しており、幅1.1 m、深さ0.1 mを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトを基調とし、S X 816を切っている。遺物は、古墳時代後期のものと思われる円筒埴輪片が出土している。

S X 816 B区南西側に位置する。検出高は30.9 mを測り、検出長は3.9 m、深さ0.1 mを測る。さらに調査区南東側にのびるものと思われる。埋土はにぶい黄褐色シルトを基調とし、S D 805に切られており、S X 817・818を切っている。遺物はS D 805同様、古墳時代後期のものと思われる円筒埴輪片が出土している。このS D 805・S X 816は、古墳に直接関連する遺構とは断定できないが、円筒埴輪片の出土状況から、近距離に古墳の存在が想起される。

第4項 平安時代の遺構

・竪穴住居

S B 003 A区北端に位置する。平面形態は長方形を呈し、検出高は30.5 mを測り、長径4.9 m、短径3.8 m、深さ0.1 mを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトを基調とする。遺物は、緑釉・灰釉陶器小片、土器片等が出土している。壁溝、柱穴などは明確に検出し得なかったが、規模、平面形態の特徴などから、住居跡の可能性があると判断した。

・土坑

S K 090 A区中央やや南側に位置する。平面形態は不整円形を呈し、検出高は30.05 mを測り、長径0.6 m、短径0.45 m、深さ0.4 mを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトを基調とする。遺物は、平安時代中期の緑釉陶器碗、皿片が数個体分まとまって出土している。

S K 430 A区南西端に位置する。平面形態は不整円形を呈し、検出高は29.85 mを測り、長径1.55 m、短径1.25 m、深さ0.2 mを測る。埋土はにぶい灰色シルトを基調とする。遺物は、土器小片とともに平安時代中期の円面硯が出土している。

S K 685 A区南西端に位置する。平面形態は不整円形を呈し、検出高は30.05 mを測り、長径0.75 m、短径0.6 m、深さ0.2 mを測る。埋土は灰色シルトを基調とする。遺物は、緑釉・灰釉陶器小片が出土している。

・溝状遺構

S D 006 A区南西側に位置し、北西から南東方向にのびる。検出高は30.55～29.85 m、底部では30.35～29.75 mを測る。検出長は22.0 mで、さらに調査区北西・南東側にのびるものと思われる。断面形態は船底形を呈しており、幅0.8 m、深さ0.2 mを測る。主軸の方向はN－25°－Wを示し、埋土はにぶい黄褐色シルトを基調とする。遺物は平安時代末期と思われる山茶碗片が出土している。

・その他

S U 001 A区北端に位置し、壁際のトレンチ内にてわずかな落ち込み状に検出される。この落ち込みは調査区側にのびておらず、この地点からセット関係が推測される平安時代中期の灰釉陶器碗・皿が一括して出土する。

第5項 中～近世の遺構

・竪穴住居

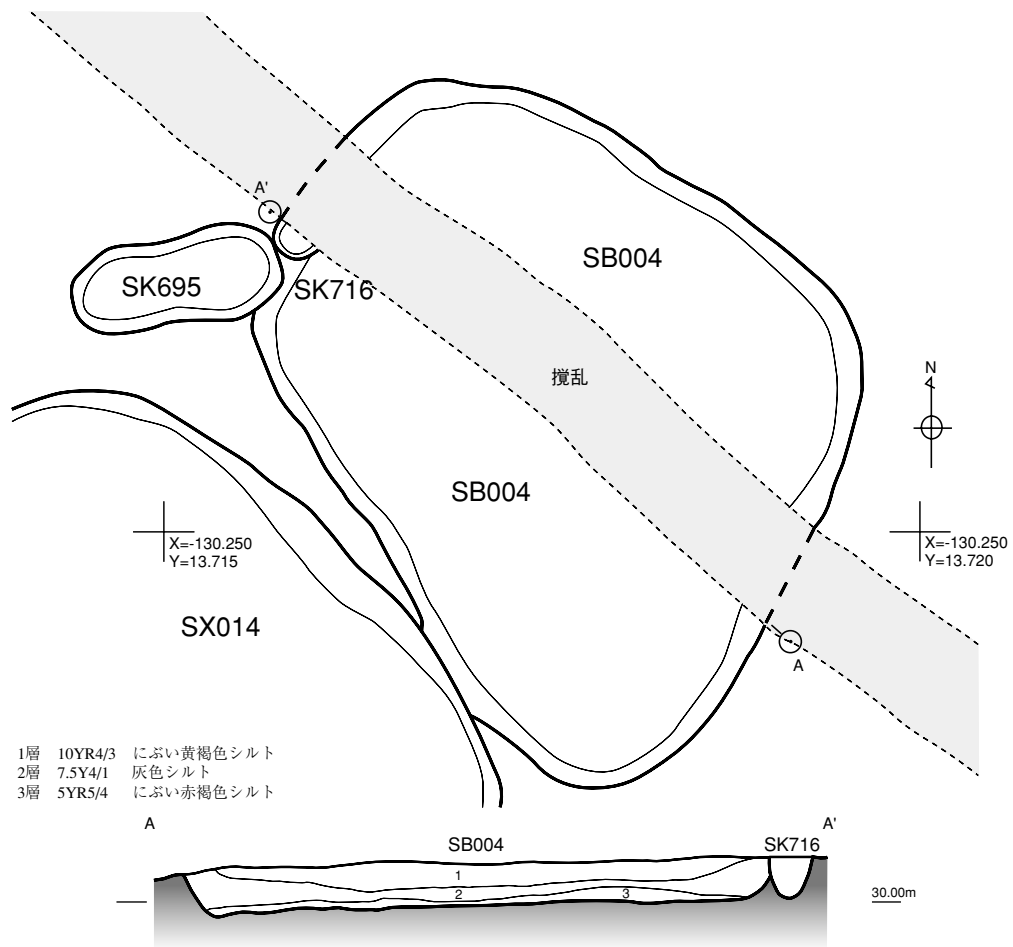
S B 001 A区中央やや北西側に位置する。平面形態は方形を呈し、検出高は30.2 mを測り、長径3.3 m、短径2.9 m、深さ0.2 mを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトを基調とする。遺物はほとんど含まれておらず、山茶碗片、土器片等が出土している。周溝と思われるものが壁添いに設けられ、その内側の床面には、0.2～0.4 mの間隔を開けてさらに一条の周溝が設けられている。位置に整合性をもつ柱穴は検出できなかったが、床面にて柱穴と思われる掘り込みが5ヶ所検出された。規模、平面形態の特徴

などから、住居跡の可能性があると判断した。わずかに検出された遺物の中に、13～14世紀の形態的特徴を有する伊勢型鍋の口縁部片が含まれており、積極的な判断材料ではないが、本遺構をこの時期に帰属させた。

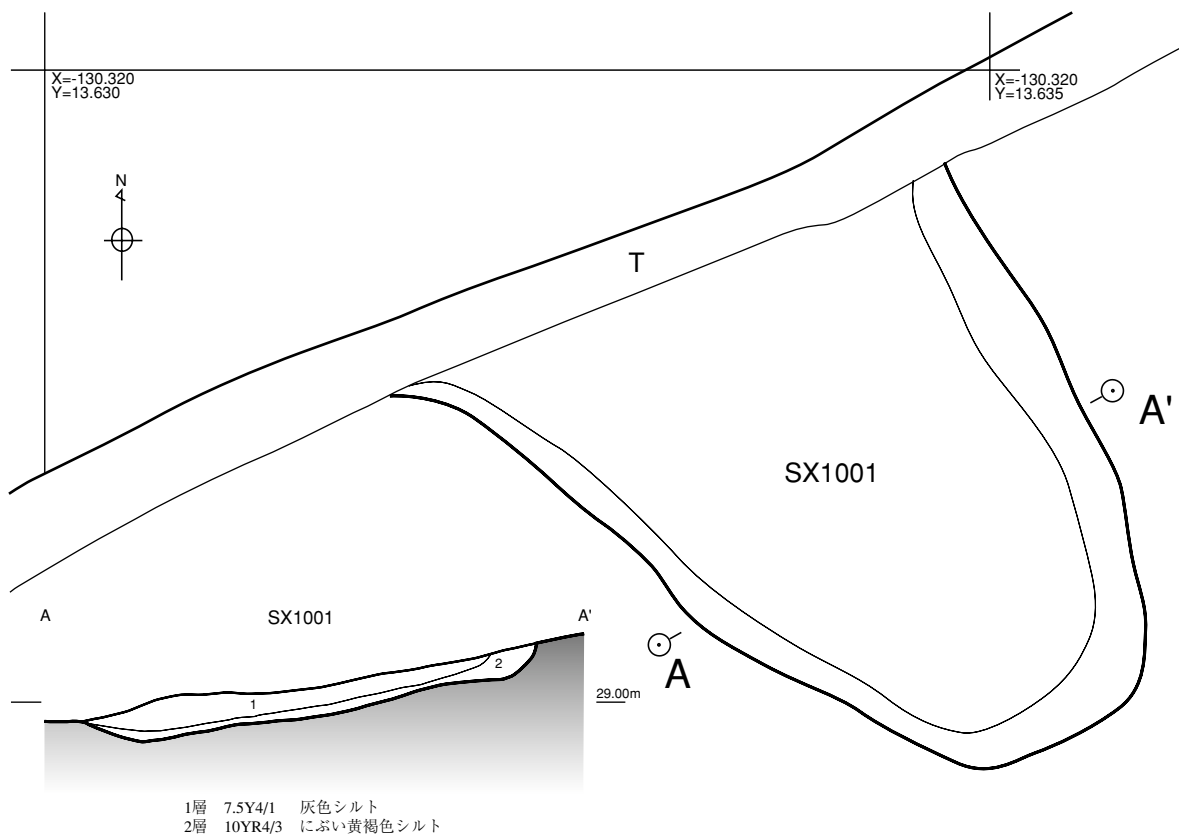
・掘立柱建物

S B 005 A区中央やや西側に位置する。平面形態が円形を呈する小規模な掘り込みが、「ロ」の字状に並ぶ。それぞれの検出高は30.3～30.8 mを測る。直径は0.35～0.7 mといずれも小規模で、検出高からの深さは0.15～0.5 mを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトを基調とするものが大半を占め、柱痕、根石、礎石等は検出できなかった。列の配置から想定した主軸の方向は、 $N-11^{\circ}-W$ 及び $W-11^{\circ}-S$ である。規模は南北5.4 m、東西6.0 mを測り、西側の一間(1.8 m)幅は間仕切りとも想定できる。推定面積は32.4 m²である。各土坑には、土器、陶器細片がわずかに含まれているもの以外、遺物が含まれていなかった。したがって、掘削期を判断する資料を得られなかったが、細片の中には中世に属する陶器と思われるものも出土しているため、この時期以前にさかのぼる可能性は低いと判断した。想定枠の南・北辺を東に延伸すると、近似する規模、方向性をもつS B 006が並立する。2棟間の距離は、約八間(14.4 m)を測る。S B 006と比較して、やや奥行きがあり、間口が狭いが、面積はほぼ等しい。

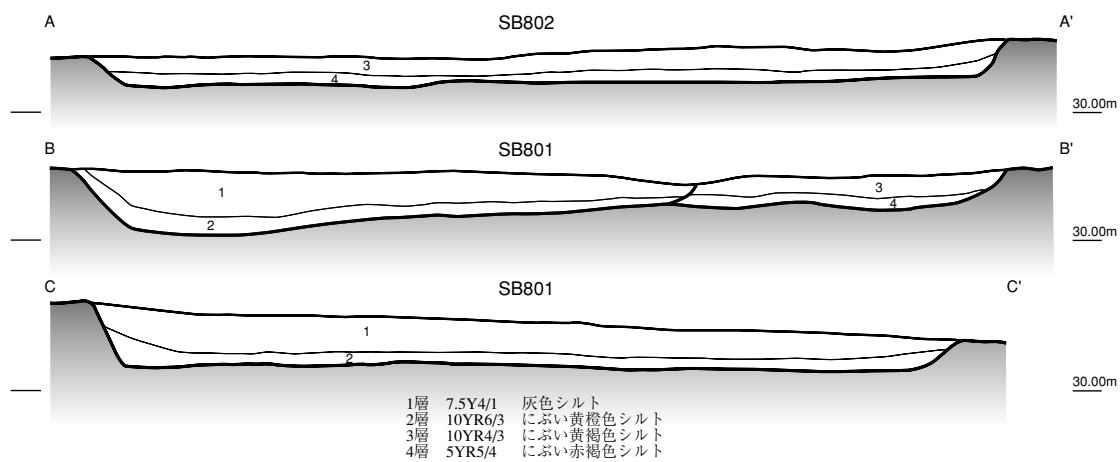
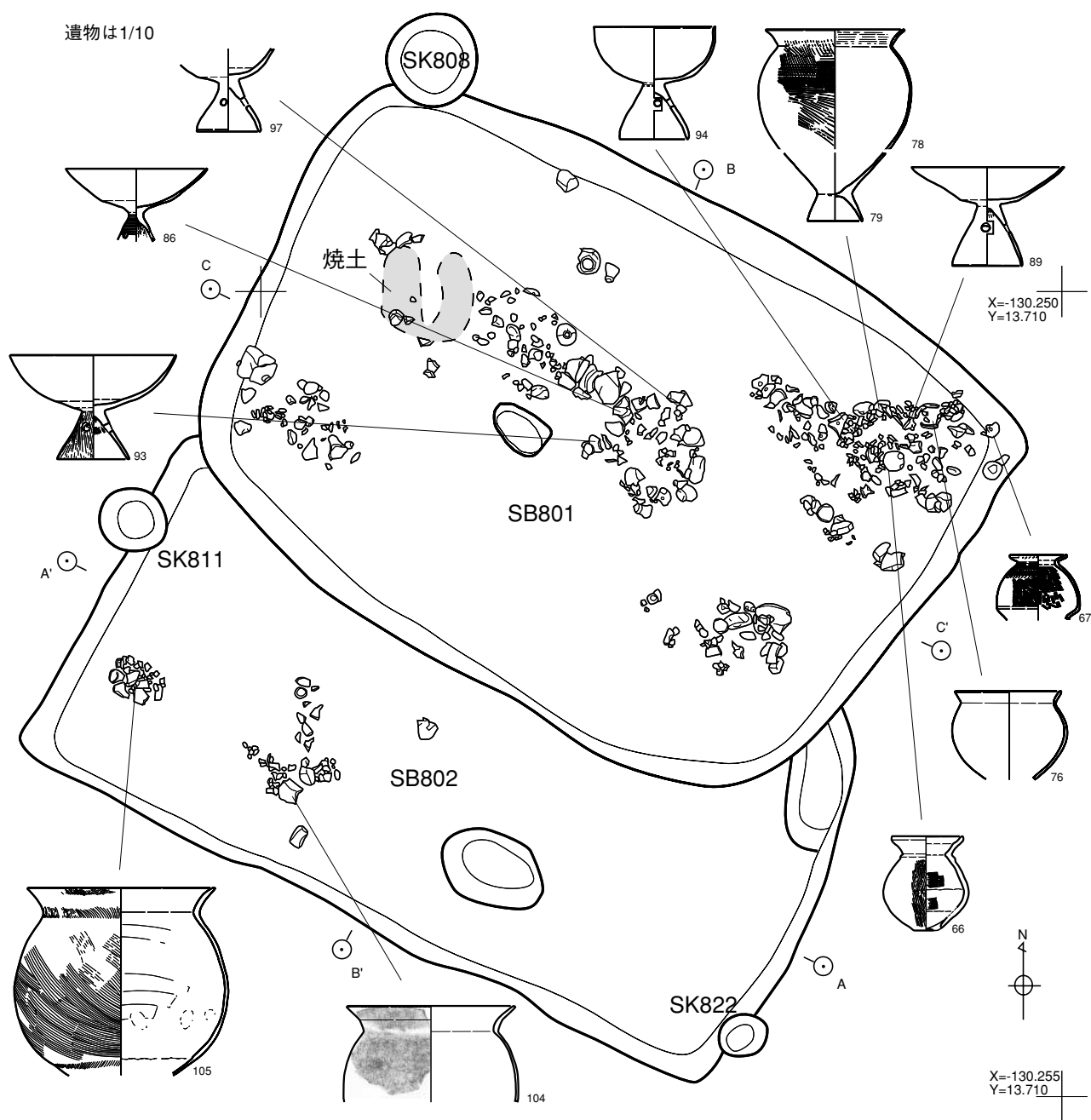
S B 006 A区中央やや東側に位置する。平面形態が円形を呈する小規模な掘り込みが、「ロ」の字状に並ぶ。それぞれの検出高は30.2～30.4 mを測る。直径は0.25～0.4 mといずれも小規模で、検出高からの深さは0.1～0.45 mを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトを基調とするものが大半を占め、柱痕、根石、礎石等は検出できなかった。列の配置から想定した主軸の方向は、 $N-7^{\circ}-W$ 及び $W-8^{\circ}-S$ である。規模は南北4.9 m、東西6.7 mを測り、推定面積は32.83 m²である。各土坑には、土器、陶器細片がわずかに含まれているもの以外、S B 005同様に遺物が含まれていなかった。したがって、掘削期を判断する資料を得られなかったが、細片の中には中世に生産されたとと思われる陶器の甕片が含まれたことから、この時期以前にさかのぼる可能性は低いと判断した。想定枠の南・北辺を西に延伸すると、近似する規模、方向性をもつS B 005が並立する。2棟間の距離は、約八間(14.4 m)を測る。



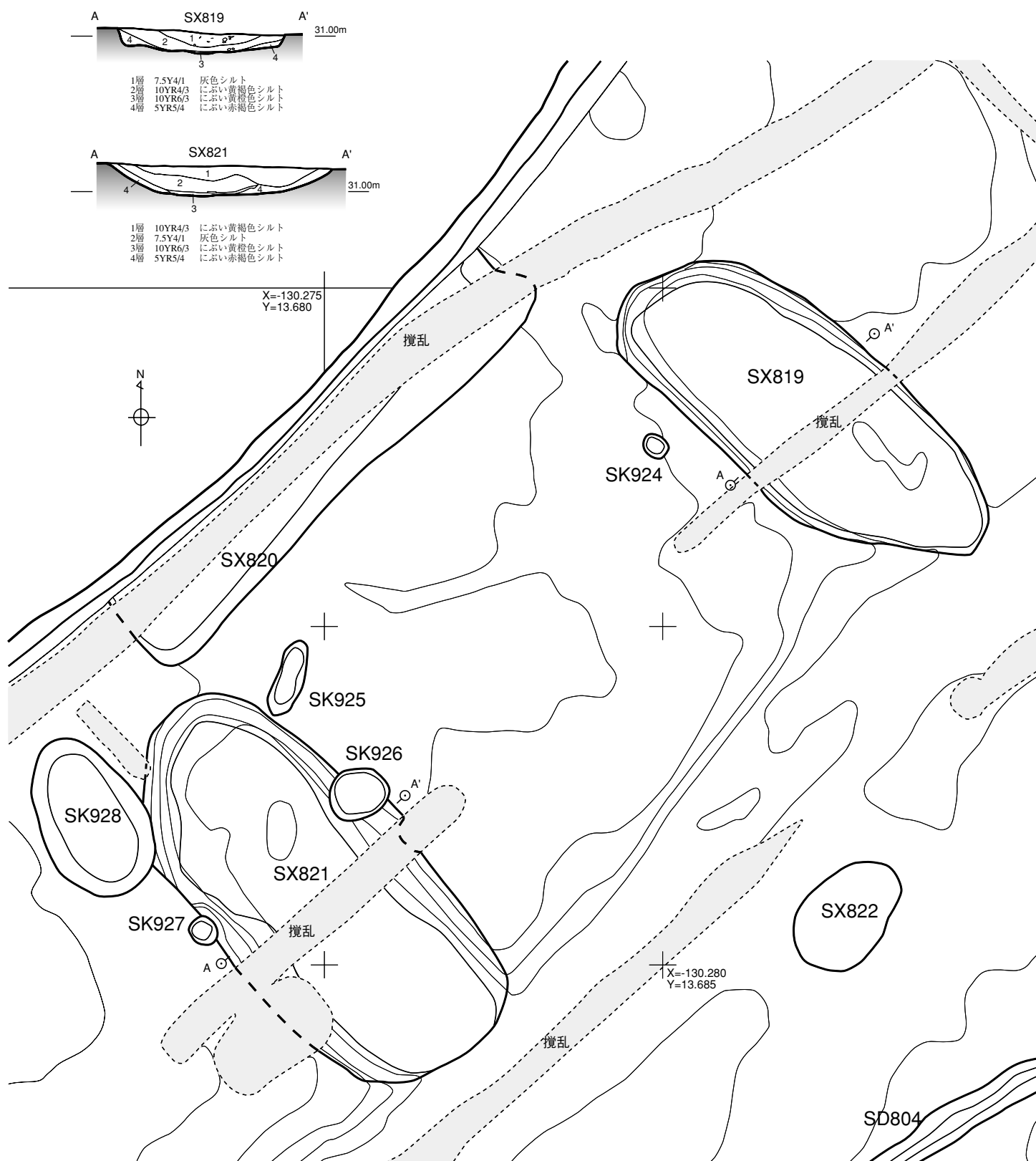
第9図 SB004 平・断面図(1/50)



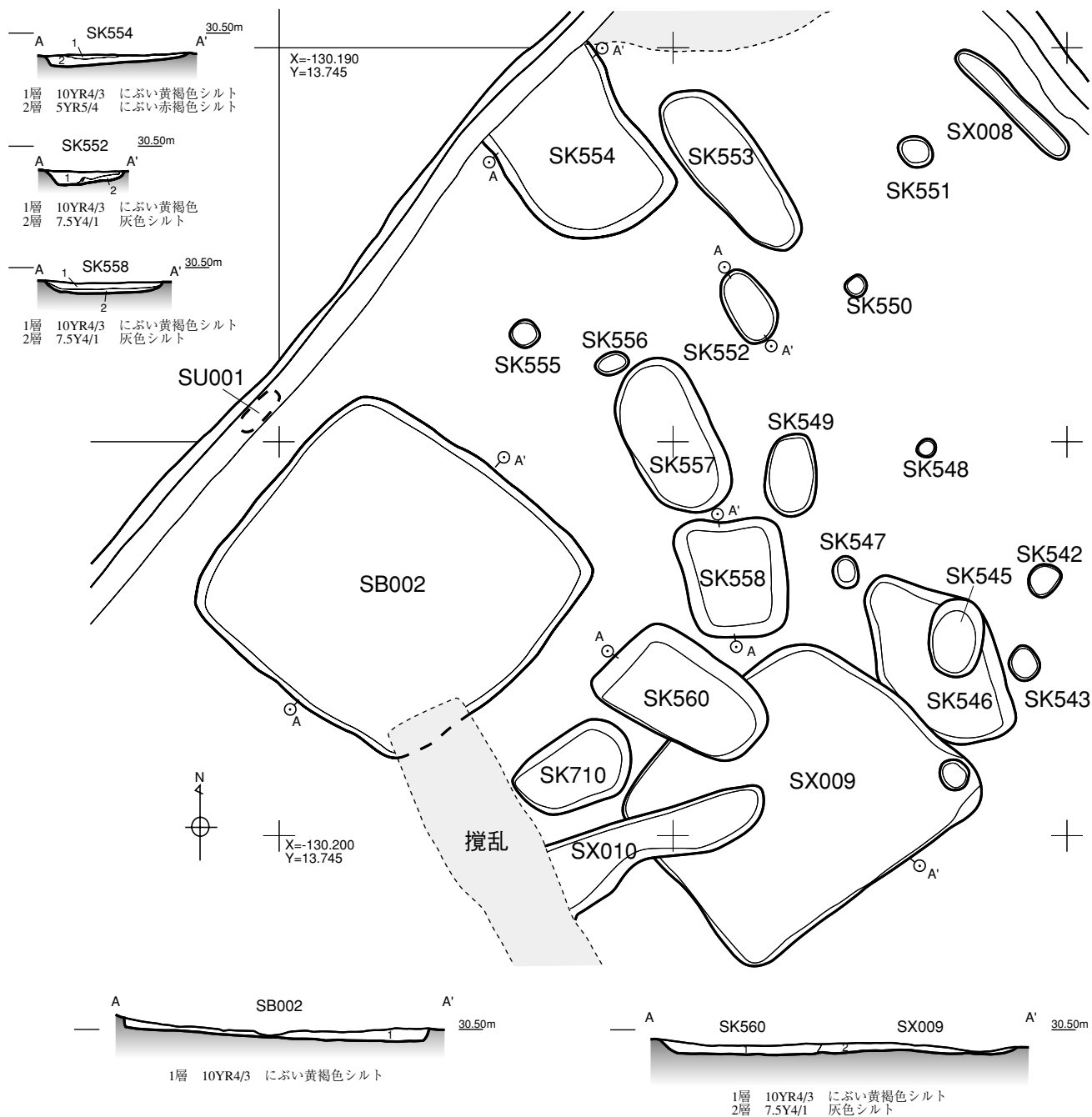
第10図 SX1001 平・断面図(1/40)



第11図 SB801・802平・断面図(1/40)



第12図 SX819～822平面図・SX819・822断面図(1/80)

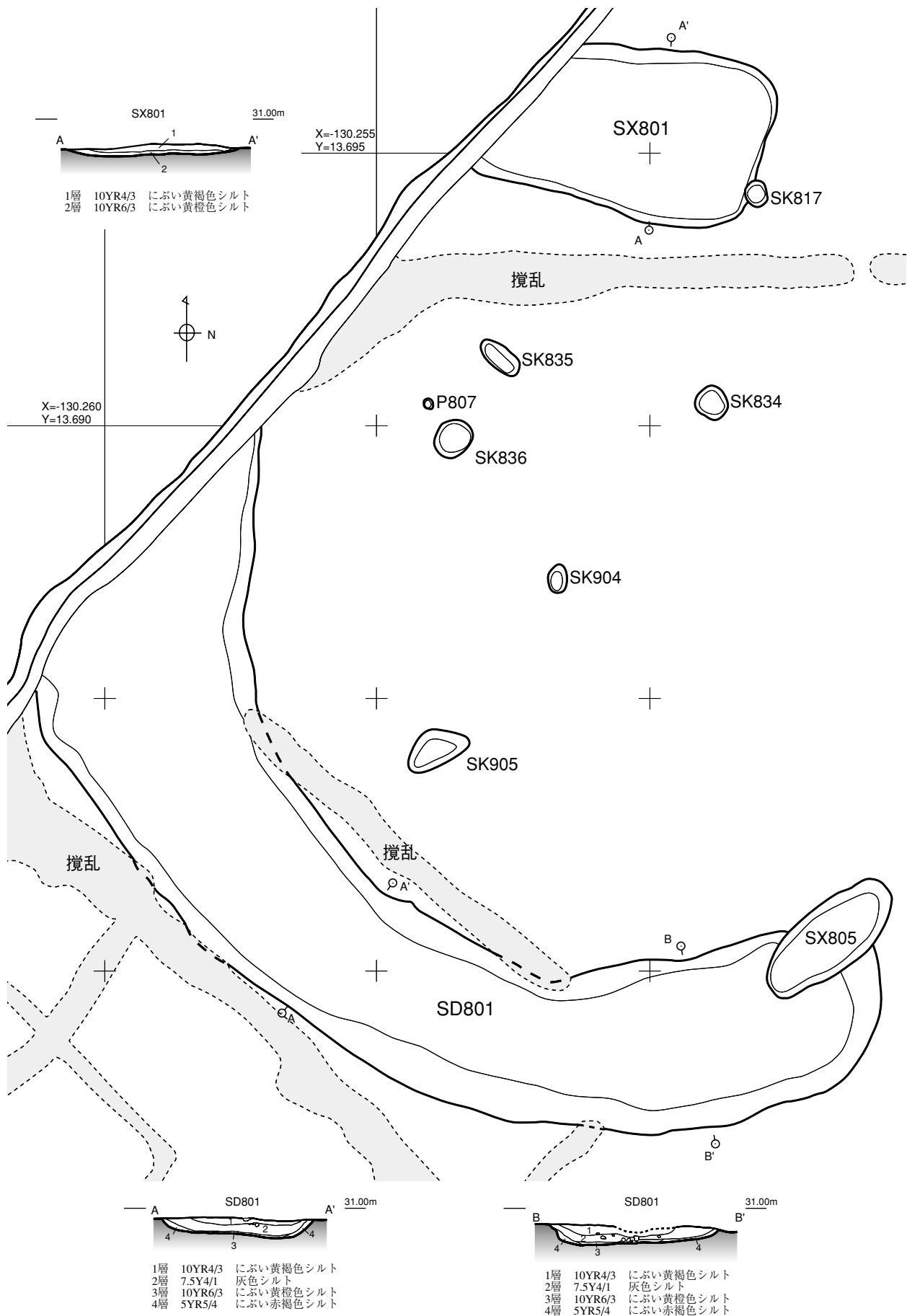


・墓墳

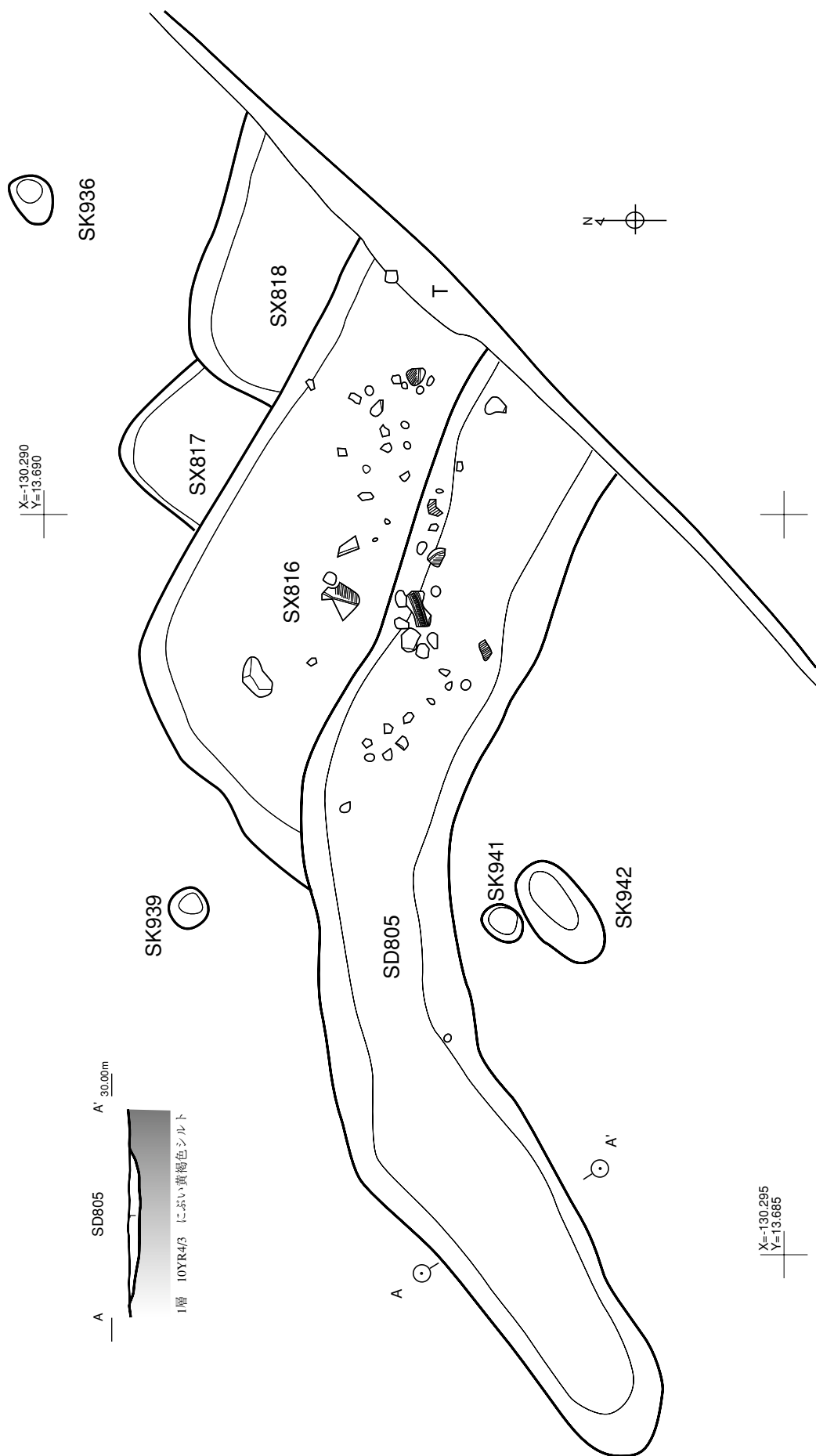
第13図 SB002周辺平・断面図(1/80)

S K 067 A区中央やや東側に位置する。平面形態は長方形を呈し、検出高は30.1 mを測り、長径1.0 m、短径0.75 m、深さ0.3 mを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトを基調とする。遺物は、床面北側から寛永通宝が六枚重なった状態で出土している。埋土中には骨片等はみられなかったが、土壙墓の可能性が考えられる。

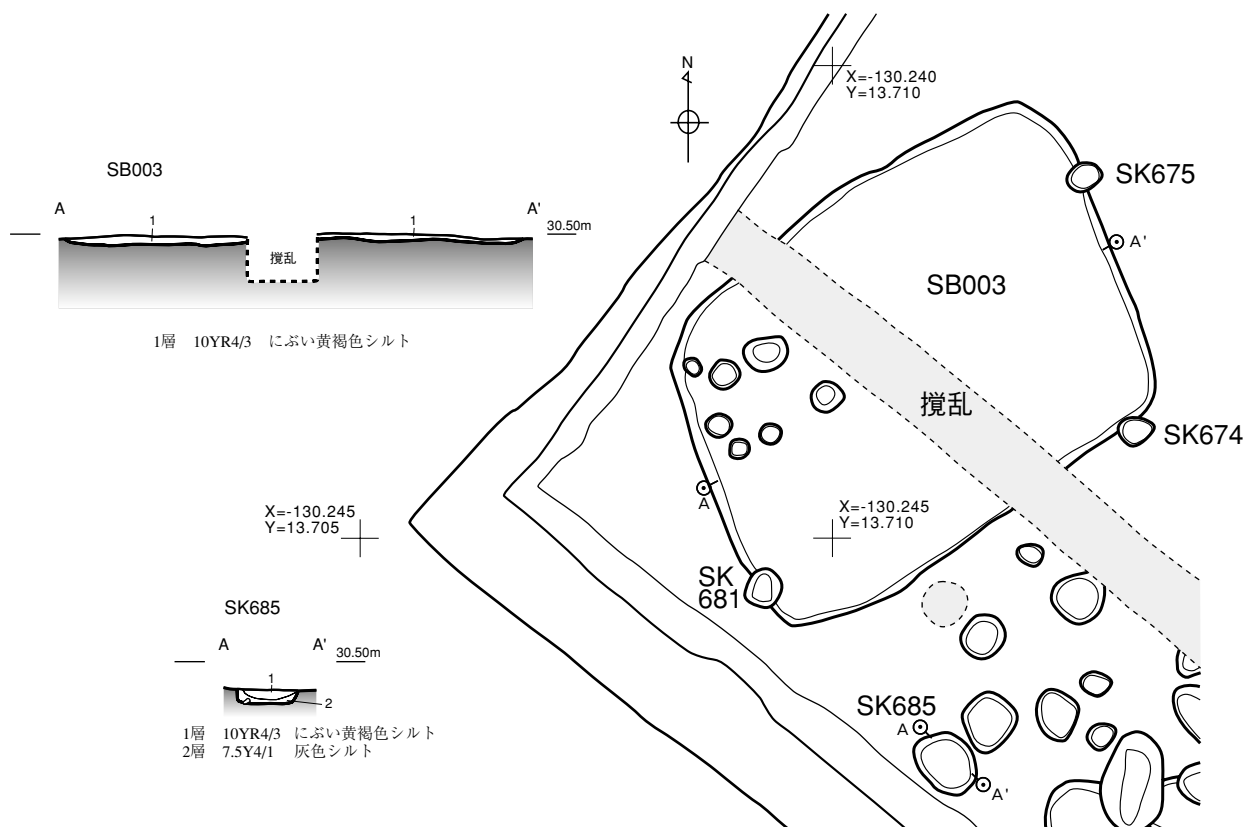
S X 001 A区中央やや東側に位置する。平面形態は長方形を呈し、検出高は29.9 mを測り、長径1.0 m、短径0.7 m、深さ0.15 mを測る。埋土は炭化物層を基調とし、床面全体は焼土化している。炭化物層には、人骨と思われる骨片や焼土ブロック、炭化した木材が混じる。遺物は、遺構ほぼ中央から銅銭の破片が出土しており、火葬墓に伴う六道銭と考えられる。骨は破碎が進んでおり、人骨であること以外に部位の特定等にはいたらず、埋葬形態は判断できなかった。



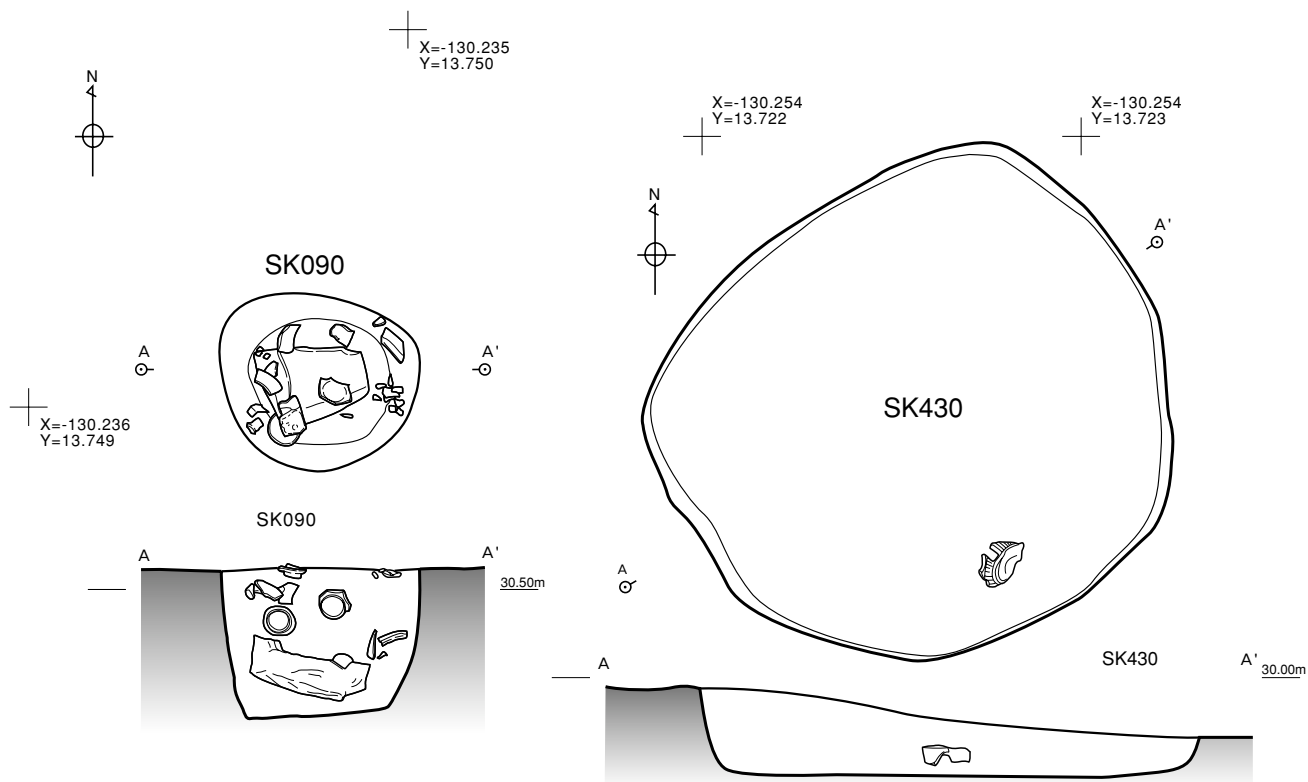
第 14 図 SD801・SX801 平・断面図(1/100)



第15図 SD805・SX816平面図・SD805断面図(1/80)

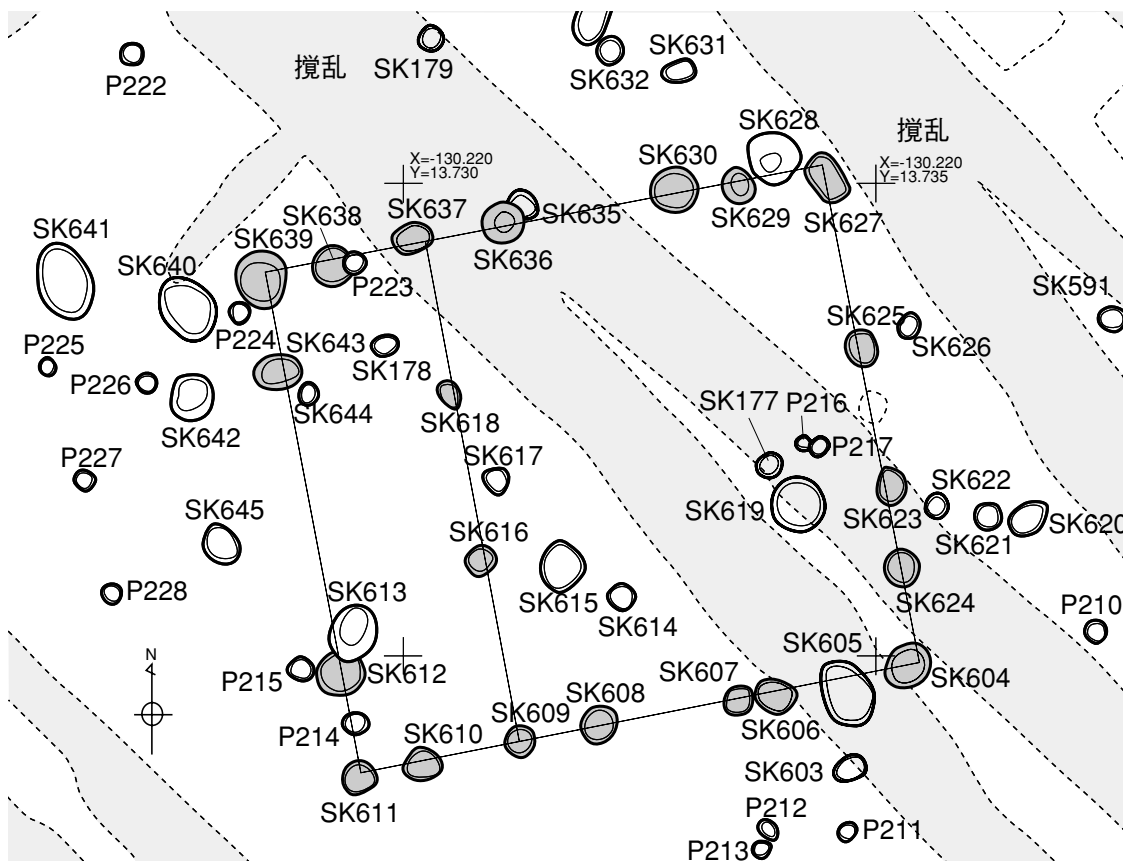


第16図 SB003・SK685 平・断面図(1/80)

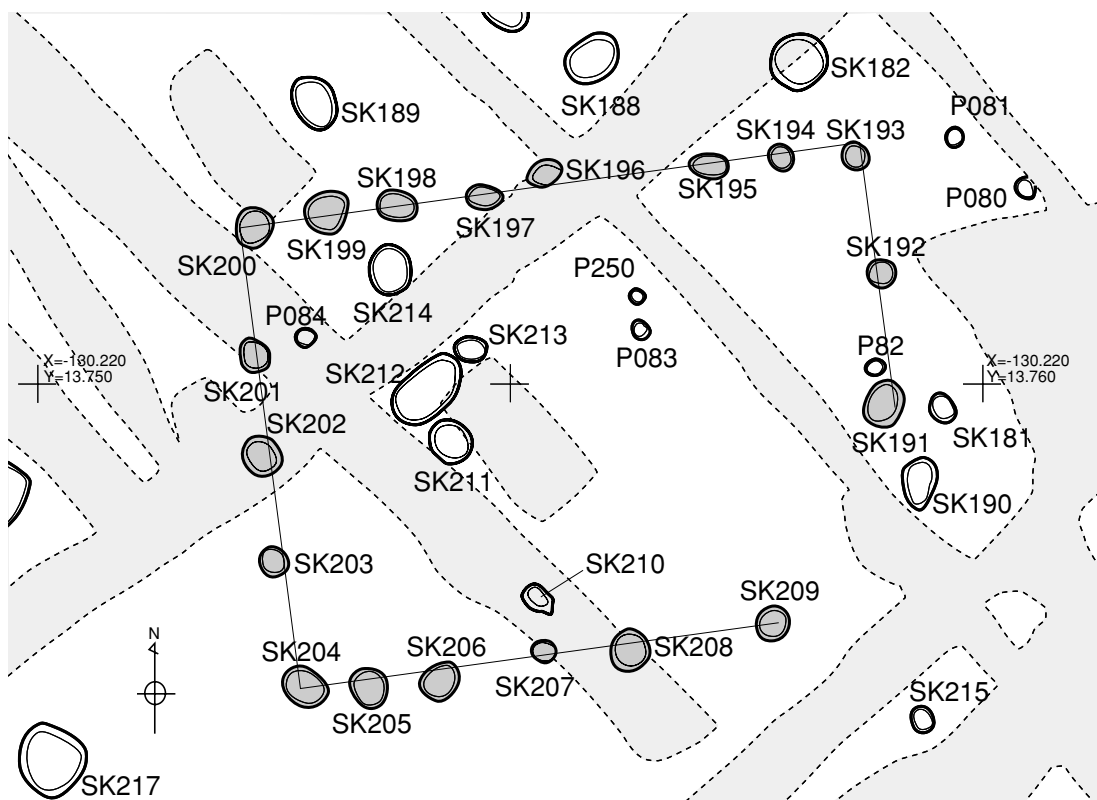


第17図 SK090 平・立面図(1/20)

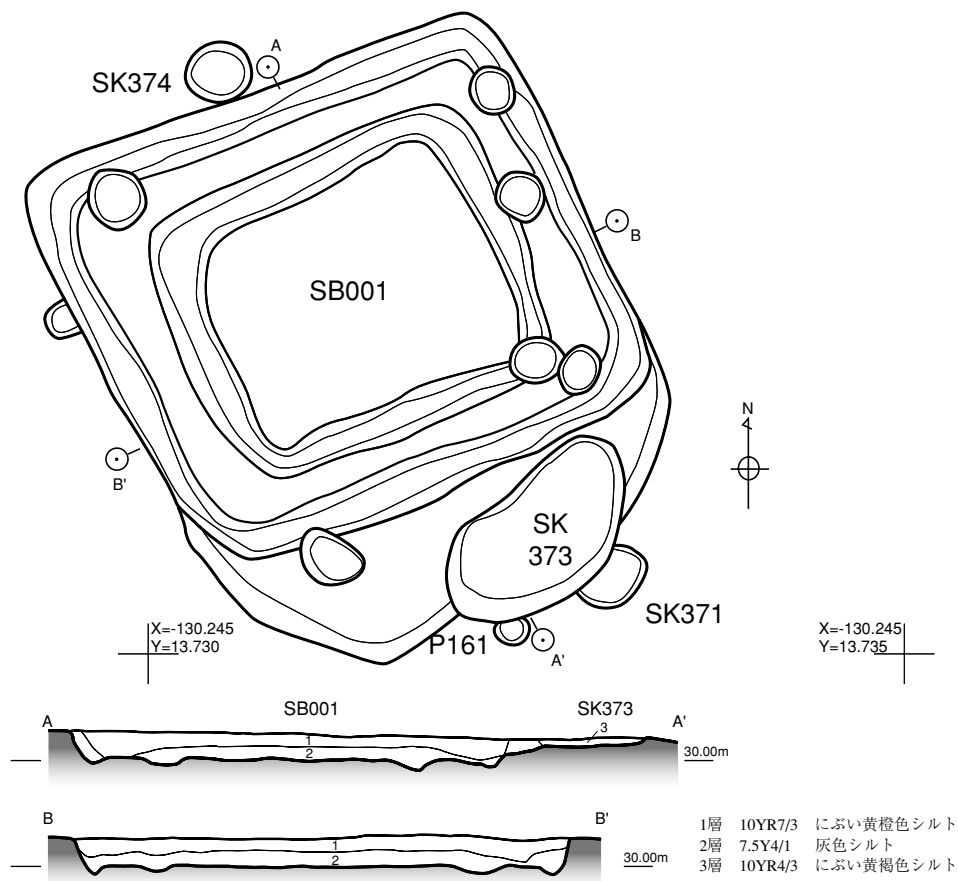
第18図 SK430 平・断面図(1/20)



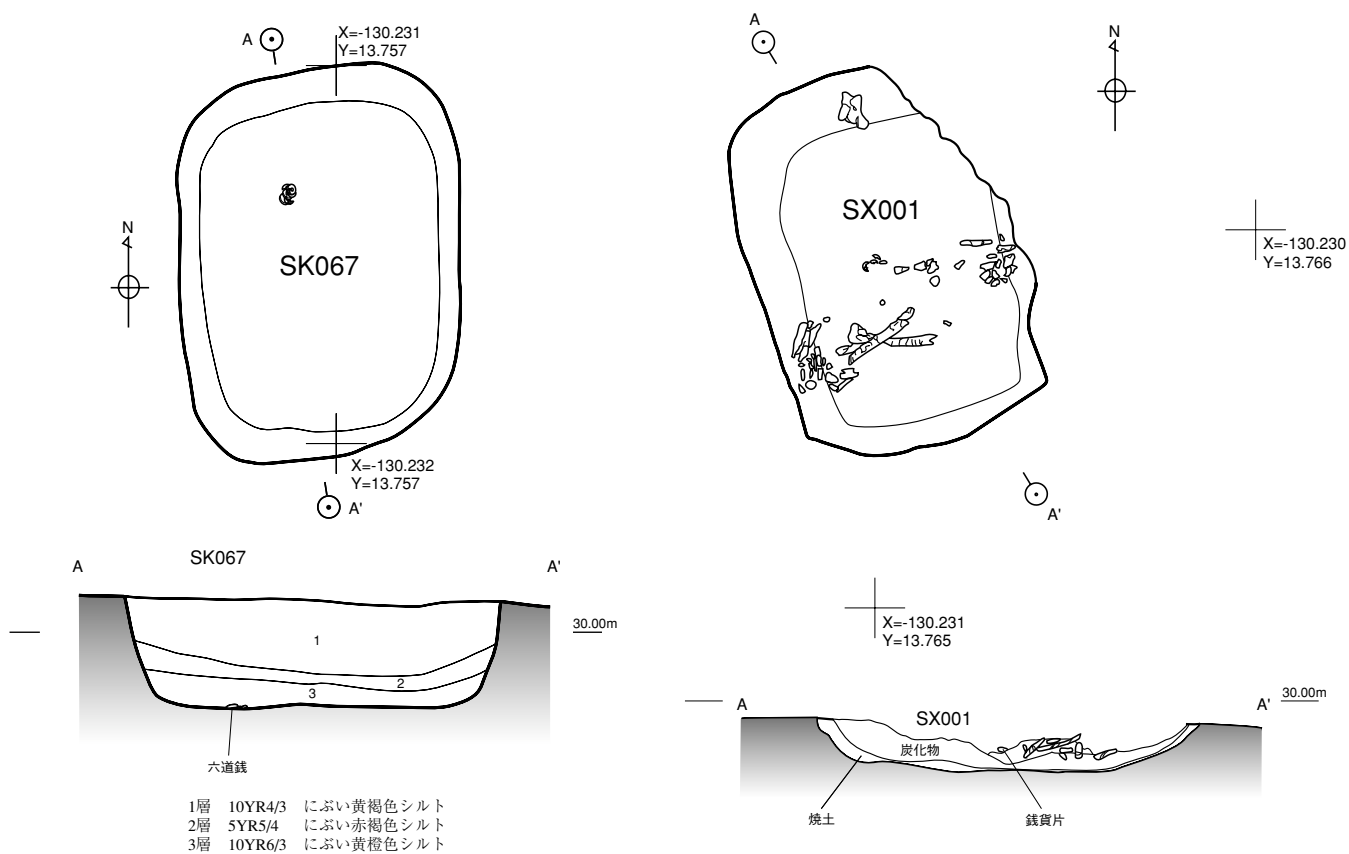
第 19 図 SB005 平面図(1/80)



第 20 図 SB006 平面図(1/80)



第21図 SB001 平・断面図(1/50)



第22図 SK067 平・断面図(1/20)

第23図 SX001 平・断面図(1/20)

第Ⅴ章 遺物

第1節 概要

石堂野B遺跡における今回の調査で出土した遺物は、前述したようにかなり少ないものであった。原因としては、基本層序の項でも述べたがいわゆる遺物包含層がみられず、水平な耕作地を確保するために基盤層まで削平された場所が多かったことによる。遺物出土量において今回の調査地点では6400㎡で約100箱である。出土遺物の時期的な比率は、弥生時代末から古墳時代初頭のものが最も多く、古墳時代後期、平安時代のものが少ないながらも出土し、中～近世の遺物は比較できる比率にはなりえなかった。

本調査地点では、基盤層の起伏、数次にわたって行われた削平行為などにより、耕作土または客土の直下は基盤層であったため、時期別に生活面としての検出が不可能であった。したがって、遺構の時期は層序的に判断が下せず、出土遺物による判断を優先した。しかしながら、出土遺物の絶対量が少なかったため、一括出土資料による細かい時期の把握は、限定された遺構のみで可能であった。

弥生時代末から古墳時代初頭の遺物は全出土遺物の大半を占めるが、遺物包含層がほとんどみられない本調査地点では、この時期の遺物は特定の遺構に伴うものが多かった。出土遺物は、欠山期に属するもので、器面は摩滅がすすんだものが大半を占め、製作時の調整方法を判断できるものが少なかった。遺構間の時期的な差については、一括資料が取り上げられる遺構が少なく、各遺構の切り合い関係による資料比較がほとんどできないため、代表的な遺構のセット関係を提示するに留める。

古墳時代後期の遺物は、須恵器、円筒埴輪、土器片等が散逸的にわずかに出土していて、特定の遺構でのみ時期判断が可能で、まとまりはみられない。

平安時代の遺物は、灰釉、緑釉陶器、山茶碗等が少ないながら出土しており、特定の遺構では数個体のまとまりがみられた。

中～近世の遺物は、土器鍋、銭貨他が認められたが、検出された他の時期に比べると絶対量が極端に少なく、遺構に伴う遺物は限定された。

ここでは、時期の把握がある程度可能な代表的遺構出土遺物を説明し、さらに個別の遺構外出土遺物について、選択的に説明する。

第2節 主要遺構別出土遺物

S B 004 遺物が、まとまって出土した数少ない遺構の一つである。1～3は広口壺の口縁部である。1・3はパレススタイルで、1の口縁部外側端面には羽状刺突が施され、3本1単位の棒状浮文が貼られ、一部に赤彩が痕跡的に観察できる。3は1同様に口縁端面が垂下し、端面に櫛による羽状の連続刺突が施されている。頸部は突帯が剥離している可能性が考えられる。2の口縁端面には斜位の刺突が連続して施されている。4はパレススタイル壺の体部で、体部上半部から櫛による凹線、櫛による山形

文、縦位連続刺突の順で施されている。5は壺体部から底部で、外面には横位のハケ、内面には板ナデが施されている。7は無頸壺、8は瓢形の壺である。8の断面形態は、最大径がやや下胴部に位置する。9～13は壺の底部片で、いずれも底部がやや突出する。14～19・23～27は甕である。底部まで残るものがないが、時期的な様相から大半が台付きになるものと思われる。ゆるやかに屈曲するものが多く、15のように器壁が極端に薄いものもみられる。16は体部の端が丸くおさまるような断面形態を呈するため、鉢の可能性も考えられる。23は口縁部が内彎して立ち上がり、端部は丸く収束する。26はゆるやかな屈曲から口縁端部にかけて直線的にのび、27は屈曲部がはっきり方向を変える。20・21はS字状口縁台付き甕で、いずれも口縁部外側の屈曲部には刺突が施されている。28～44は台付甕の脚である。断面形態はやや内彎するものが多く、28には内面にススが付着しており、30は被熱痕がみられる。45・46はS字状口縁台付甕の脚部である。45は粗いハケによって調整されており、内面には別の粘土が補填されていることが観察できる。47～61は高杯である。47は口縁部の端面がやや内傾しており、49は杯の受け部と立ち上がり部の境が不明瞭である。50～55は脚部の上位に櫛によるものと思われる横線が施されている。51のように脚の裾部が外反するものもみられるが、脚の断面形態はわずかに内彎するものが多い。55は脚の器壁がやや厚めを呈し、58には被熱痕がみられる。62・63は小型の鉢で、63には内外面にやや細いハケの調整痕がみられる。65は土錘で、球状を呈し、指押圧とナデによって整形されており、孔内は直線的で、棒に巻きつけて成形されたものと思われる。

これらのS B 004出土遺物は、形態的特徴などから欠山期の後半に属するものと思われる。

S B 801 本遺構もS B 004と同様に遺物がまとまって出土した遺構である。66～70は壺である。66は有段口縁で頸部に突帯を有し、パレススタイルを意識した小型の広口壺と思われる。底部は焼成後に穿孔されており、祭祀的に使用された可能性も考えられる。67は口縁部外側から体部上位にかけて、櫛描きと斜位の刺突が交互に施されており、体部の最大径はやや下位に位置する。体部下位の欠損部の屈曲から、有台の可能性も考えられる。70は大型広口壺の体部上半で、頸部に突帯が巡り外面には斜位のハケが施されている。71～85は甕で、口縁部から底部まで残存するものは認められなかったが、時期的な特徴から大半が台付き甕と思われる。74の口縁部は、外側に折り返されて有段となっており、指押圧にて整形されている。75の外側は粗い不揃いなハケ調整が施され、口縁端部は垂直気味に立ち上がり外側にやや肥厚する。76は器高と最大径の比率を推定しうる遺存度であるが、器高に対して最大径が広いものと思われ、三河地域の様相を呈する。78は口縁部付近の断面形態が「く」字状に屈曲し、外側体部中～下位には斜位の、上位～口縁部にかけては縦位のハケ調整が施され、体部はやや丸い。80は体部の中位から下半部に斜位のハケ、上位には縦位のハケが、内側には横位の板ナデが施されている。86～101は高杯である。86～88の脚部には櫛によるものと思われる横線が施されている。87のように脚部裾が横に大きく広がるもの、92のように脚部が外反して裾部で横位にやや広がるものもみられるが、脚部の断面形態はわずかに内彎するものが多くみられる。杯部は94～96のように碗型を呈するものもみられるが、86・89のようにわずかに稜を有し直線的に開くもの、97のように稜がほとんどみられず杯部がやや開き、口縁端部が丸いものもみられる。90・98には被熱痕がみられる。102は土錘で、胎土は粗い砂粒を多く含み、紡錘型を呈し、両端には使用時のものと思われる欠損部がみられ、孔は直線的で棒に巻きつけてつくられたものと思われる。

これらのS B 801 出土遺物は、形態的特徴などから欠山期の後半に属するものと思われる。

S B 802 103は壺の下体部と思われ、屈曲部が接合部となっていて擬口縁を成す。擬口縁外面には横線がみられる。104～106は甕で、104の外面には粗いハケが施され、口縁端部には連続刺突が施されている。105は口縁部付近の断面形態が「く」字状にやや長く立ち上がり、体部は球形を呈し、体部外面はやや粗い斜位のハケ、内面は斜位の板ナデが施されている。

本遺構はS B 801に切られているが、出土遺物による時期的な相違はほとんどみられず、同様に欠山期の後半に属するものと思われる。

S X 819 本遺構及びS X 820・821は、それぞれが同一の方形周溝墓の溝と思われる。111～114は広口壺片と思われ、111は口縁端部がやや面をもち、112には内面に板ナデが施されている。113・114は広口壺頸部で、いずれも突帯が巡る。いずれも欠山期の形態的特徴を有する。

S X 820 本遺構及びS X 819・821は、それぞれが同一の方形周溝墓の溝と思われる。115は広口壺で、摩滅のため器面の調整等が判断し得ない。116・117は高杯で、116は杯受け部と立ち上がり部の屈曲はやや稜があり、口縁端部が外反する面をもつ。117の脚に設けられた透かし穴は、やや上位に位置する。いずれも欠山期の形態的特徴を有する。

S X 821 本遺構及びS X 819・820は、それぞれが同一の方形周溝墓の溝と思われる。118～121は壺である。118は広口壺で、最大径はやや下位に位置し、口縁部は逆「八」の字状に広がり、端部が面を成す。体部上位に簾状文風の横線・横線、その下位に波状文が施され、内面には板ナデが施されている。119は小型の直口壺と思われる。120は広口壺の体部で、最大径がやや中位に位置し、底部が凹面を呈し、内外面にハケ調整が施されている。121は広口壺で、口縁端部がやや肥厚して丸く収束し、外面に刺突が施されている。体部は球形を呈する。122は鉢で、外面は粗いハケ、内面には板ナデが斜位に施されている。いずれも欠山期の形態的特徴を有する。

S X 1001 123～125は広口壺である。123は体部最大径が下位にあり、底部は突出する。頸部には突帯を有し、口縁部は逆「八」の字状に外反し、端部がわずかに面を成す。124はパレススタイルを意識したものと思われ、口縁端部は垂下して面を成し、内面は有段となる。口縁部内側には三段の羽状連続刺突が施され、口縁端面には棒状浮文の痕跡がみられる。頸部には突帯が巡る。上半部とは別個体の可能性も考えられるが、体部片の外面には羽状の刺突・横線・山形文が施されている。126は浅い椀形高杯で、口縁端部は外反する面をもつ。時期的には、S B 004・801・802、S X 819～821よりも新しい様相が形態的特徴からみられ、欠山期の後出形態の様相を呈する。

S D 801 121は甕で長胴形を呈し、くびれがあまく、ハケも観察し得ない。130・131は同一個体の可能性も考えられる須恵器片である。焼成が軟質で整っていない波状文が施されている。同一個体だとすれば、5～6世紀前半代にみられる長頸壺とも考えられる。

S X 801 132は須恵器のハソウで、口縁部外側に細かい波状文が施されており、体部は大きめで頸部径は広めである。133は須恵器の杯蓋である。いずれも、5世紀後半の時期に属するものと思われる。

S D 805 本遺構からは、円筒埴輪片のみ出土しており、同様に埴輪片のみ出土したS X 816と並んでいる。134は朝顔形を呈し、内外面には粗いハケ調整が施されている。135・136には外面は一次調整として粗いタテハケが施され、突帯を貼り付けてナデを施し、二次調整としヨコハケが施されている。時

期的には、5世紀末の様相を呈する。

S X 816 本遺構からは、円筒埴輪片のみ出土しており、同様に埴輪片のみ出土したS D 805と並んでいる。138には外面に一次調整のタテハケのみが施されており、S D 805出土の埴輪片と比較して、やや新しい様相を呈する。

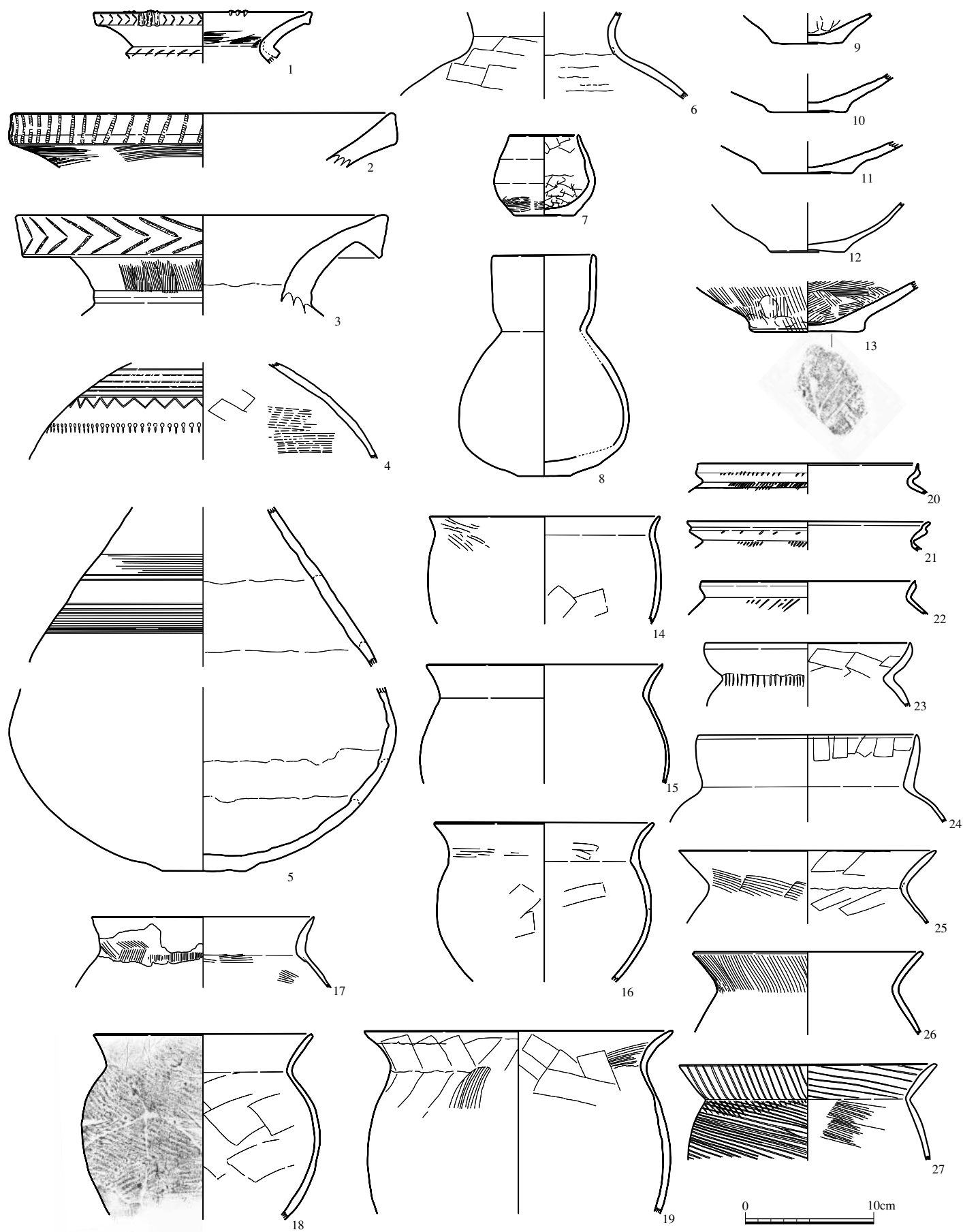
S K 090 本遺構からは、緑釉陶器片がまとまって出土している。139・140は緑釉陶器の稜椀で、焼きが硬質で、内外面とも丁寧なヘラミガキが施されている。142の椀は高台がやや高めで、内外面ともに丁寧なヘラミガキが施されており、焼きがやや軟質である。時期的には、平安時代中期の様相を呈する。

S D 006 本遺構からは、山茶碗の底部片が出土している。いずれも胎土は砂質が強く、高台は太めで渥美産の特徴がみられる。時期的には、平安時代末の様相を呈する。

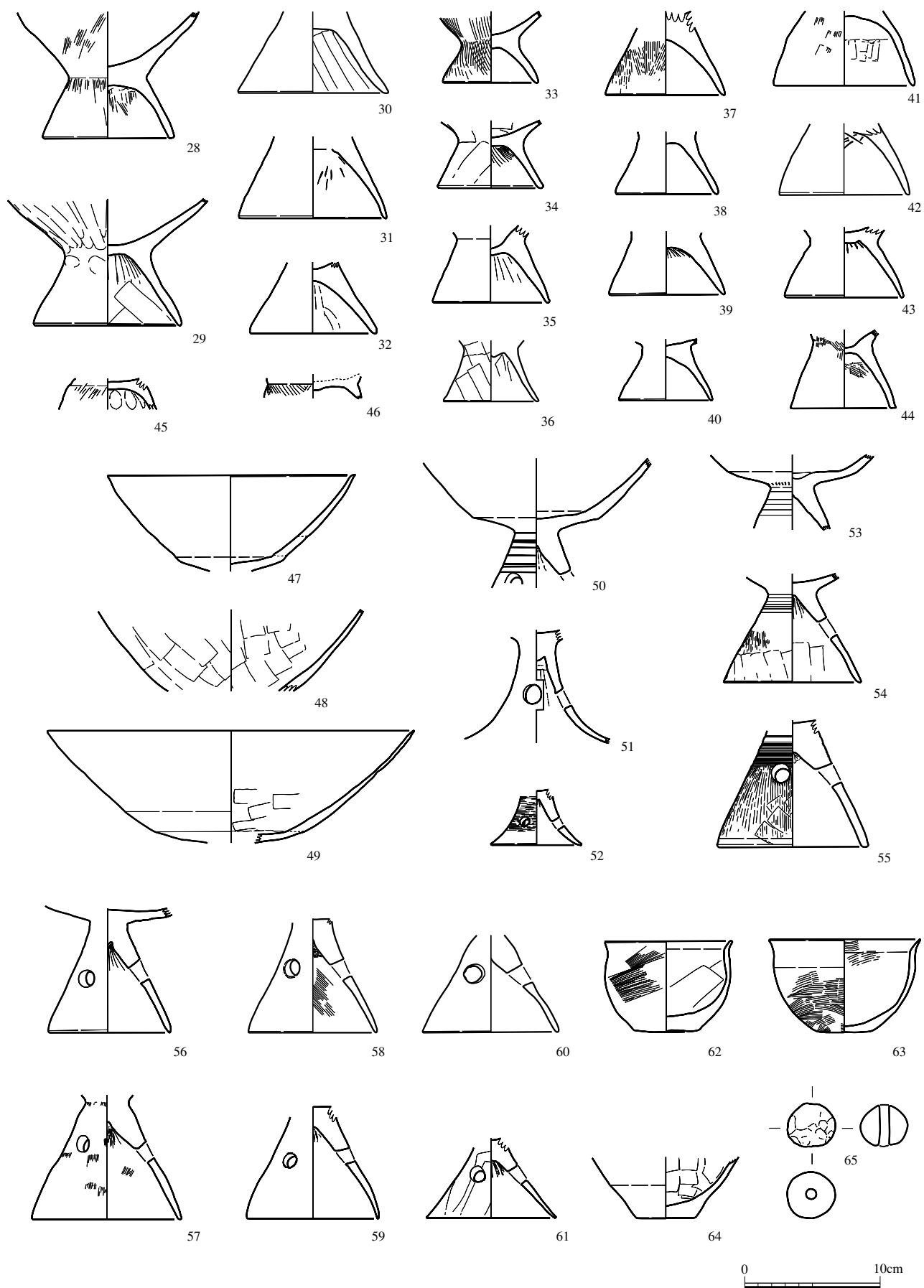
S U 001 本遺構はトレンチ内でのみ確認できたもので、灰釉陶器の一括した出土をみた。156は灰釉陶器の小瓶で、口縁端部の欠損は意識的に打ち欠かれた可能性が考えられる。157・159・160は灰釉陶器の小椀で、いずれも釉はツケガケされており、157の高台は、断面形態の三角形が高めで、159は高台のつくりがやや雑である。158は灰釉がツケガケされた皿である。時期的には平安時代中期の様相を呈するが、遺存度の良好な器種のまとまりを考えると、宗教儀礼用具としての六器など、セット関係も想起される。

S K 067 本遺構は土墳墓と考えられる遺構で、銅銭が六枚重なった状態で出土している。168～173はいずれも銅貨で、「寛永通寶」である。168・170には背に「文」が入る。169・173が古寛永、168・170・172が新寛永と思われる。

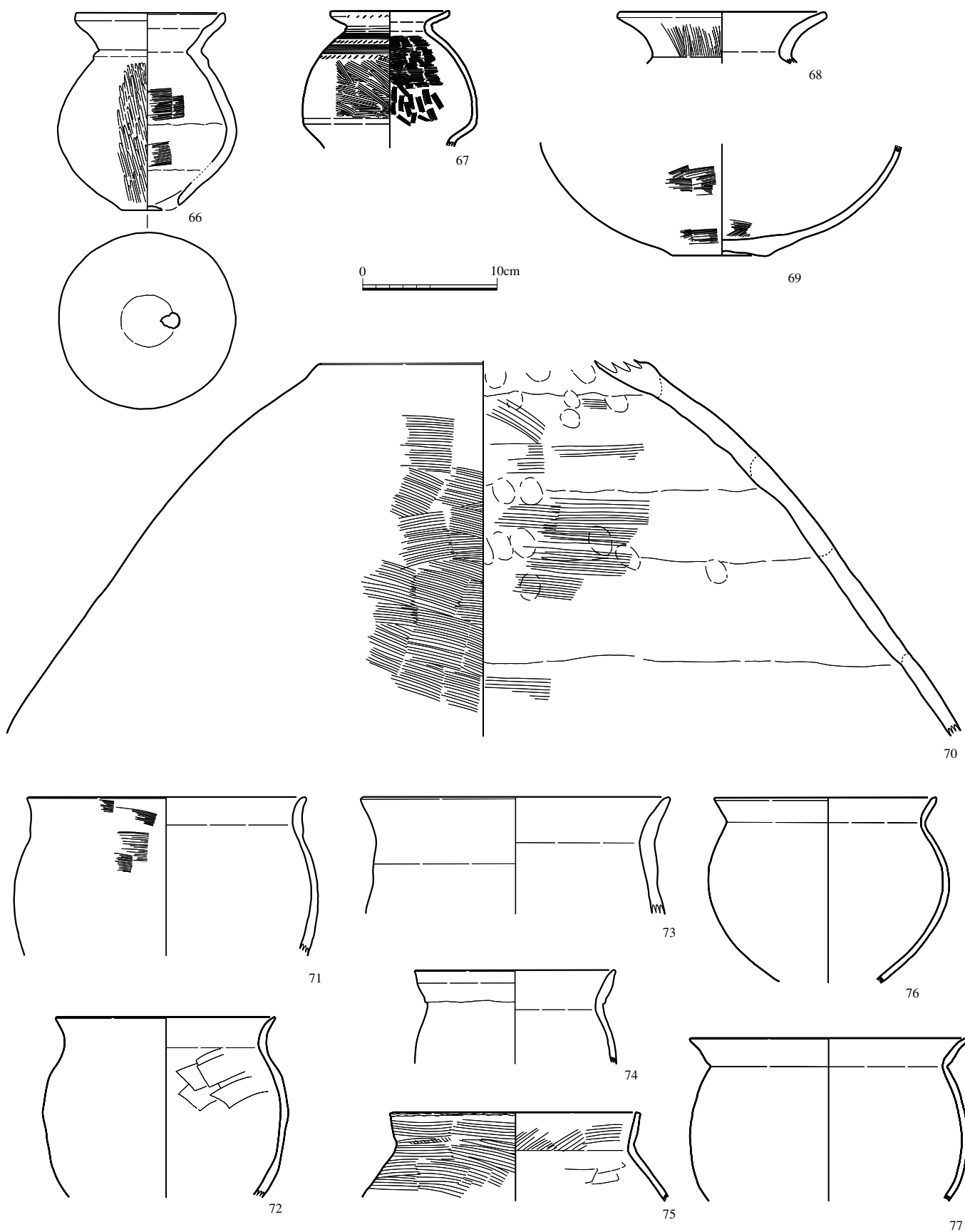
その他 遺物が一定のまとまりで出土していない遺構からの出土遺物、時期的な特徴を有する出土遺物を記述しておく。145はS K 430出土の円面硯片である。大きめに空けられた四角形の透かしに特徴がみられる。165は遺構外から検出された円面硯片で、斜格子状にやや雑な沈線が施されていて、陸部はやや低めである。どちらの円面硯も平安時代中期のものと思われる。166・167は伊勢型鍋片である。166はS B 001から出土しており、口縁端部は内側に折り返され肥厚し、折り返し部は幾分薄く幅広で、端面はやや内彎する。口縁端部片のみであるが、時期的には14世紀代の形態的特徴を有する。167はS K 569から出土しており、166と同様に口縁端部は内側に折り返されて肥厚し、端面は内彎するが、明確な頸部を有し、直立する頸部が長めである。166と比較するとやや先行する形態的特徴を有しており、13世紀代に属するものと思われる。



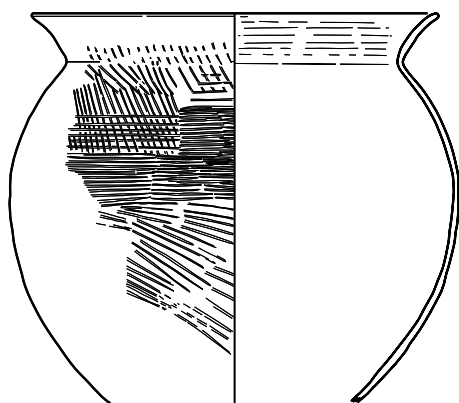
第24図 出土遺物実測図(1)



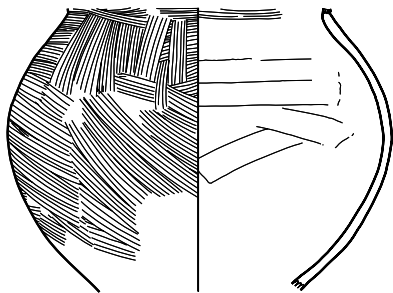
第25図 出土遺物実測図(2)



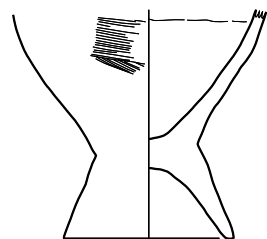
第 26 図 出土遺物実測図 (3)



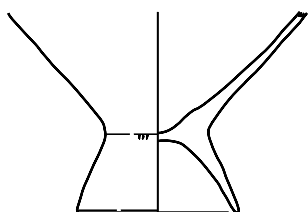
78



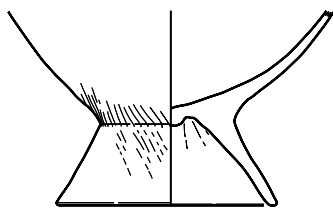
80



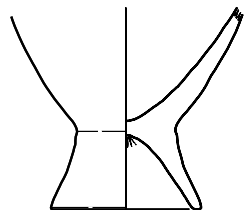
82



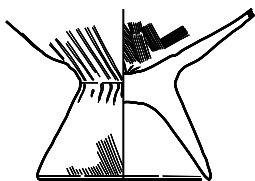
79



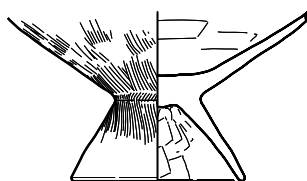
81



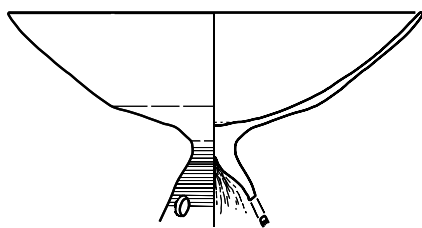
83



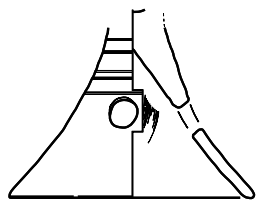
84



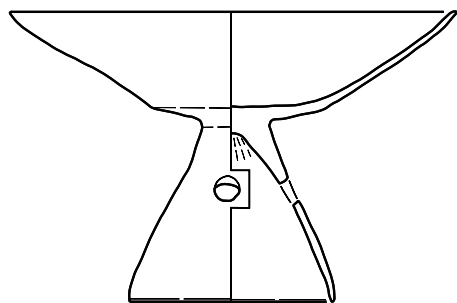
85



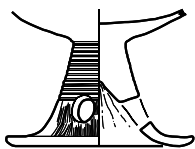
86



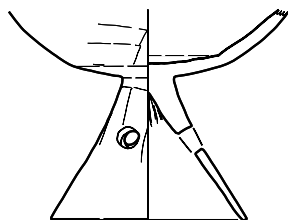
88



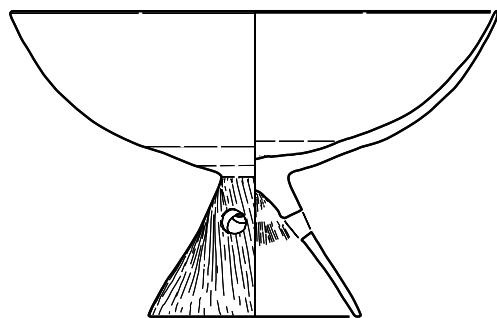
89



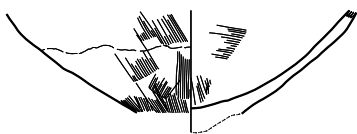
87



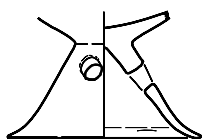
91



93

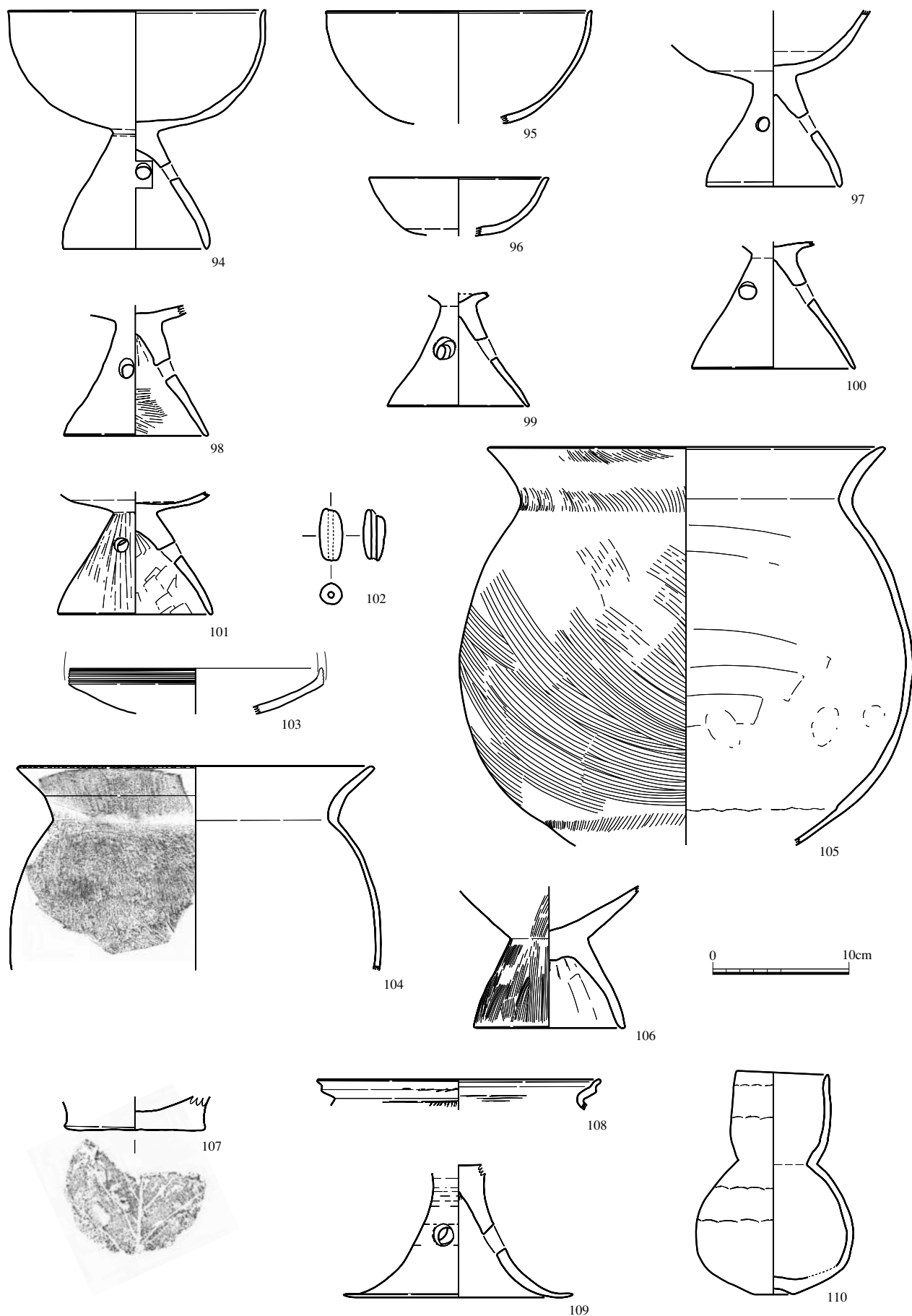


90

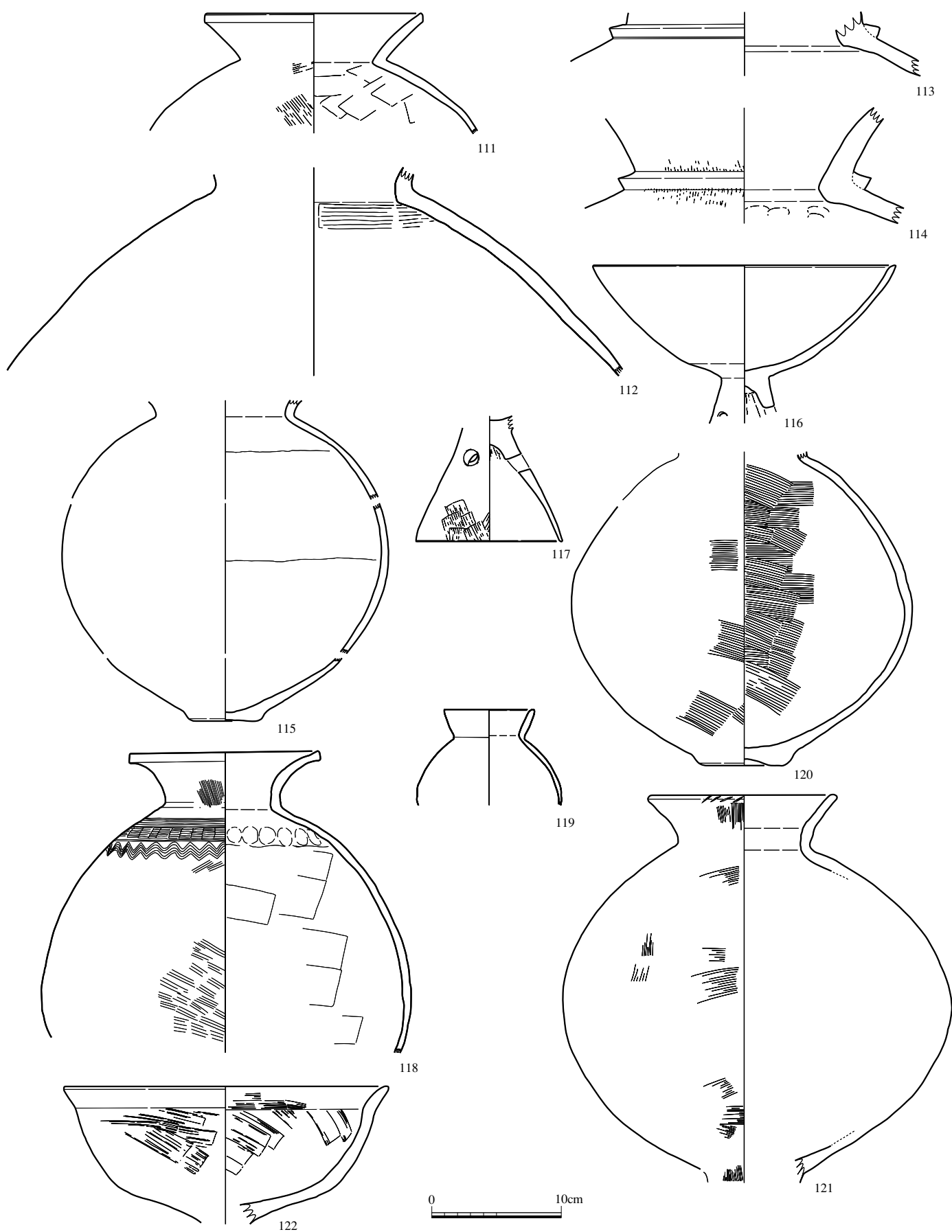


92

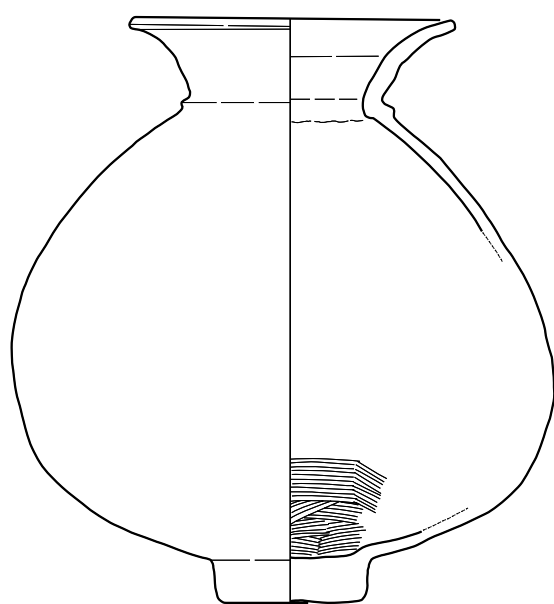
第27図 出土遺物実測図(4)



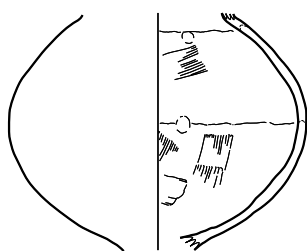
第28図 出土遺物実測図(5)



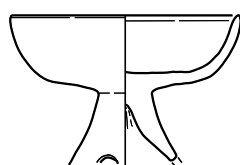
第29図 出土遺物実測図(6)



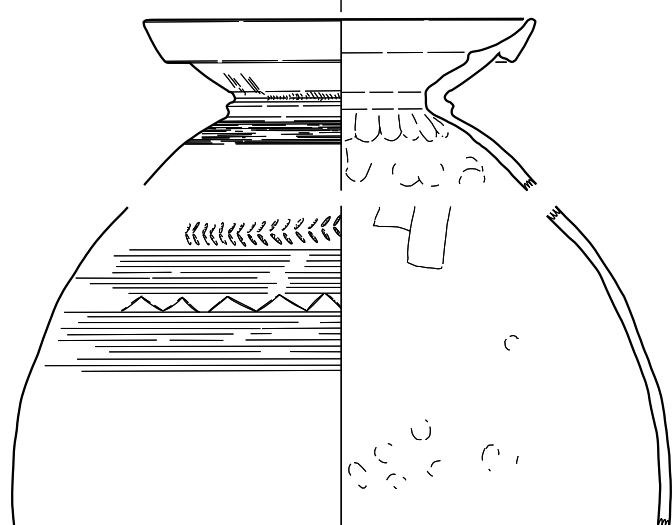
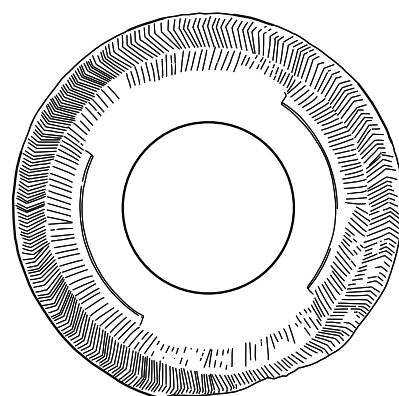
123



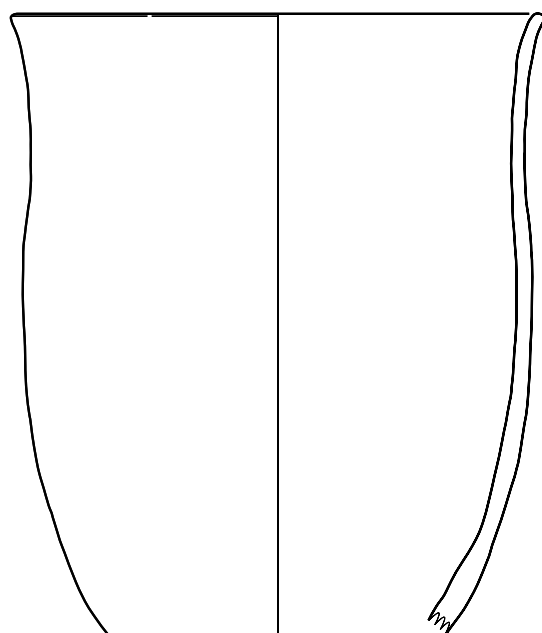
125



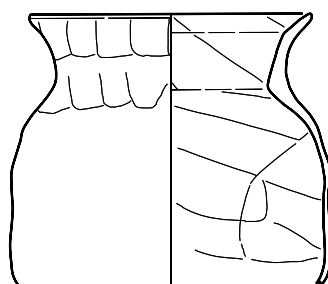
126



124



129



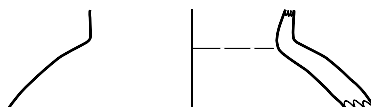
127



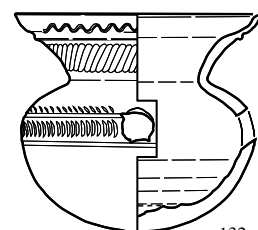
128



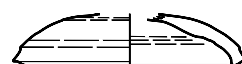
130



131

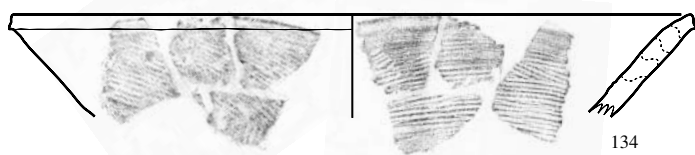


132

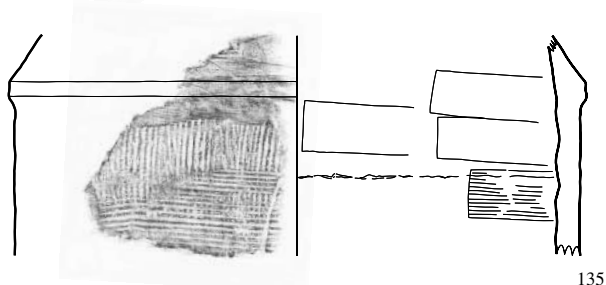


133

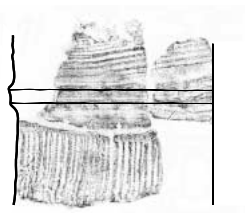
第30図 出土遺物実測図(7)



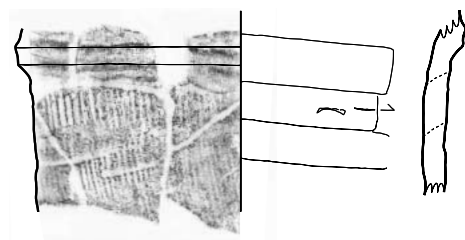
134



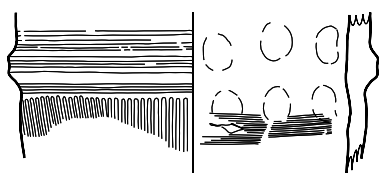
135



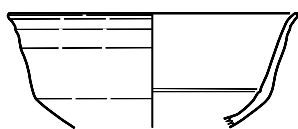
136



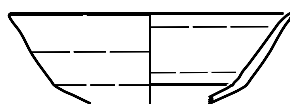
138



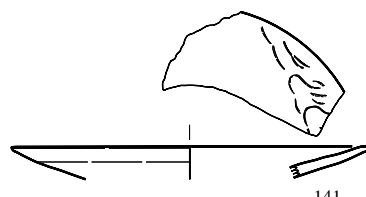
137



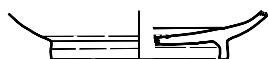
139



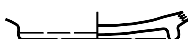
140



141



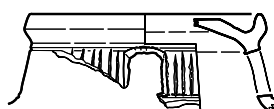
142



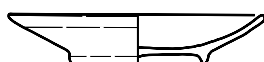
143



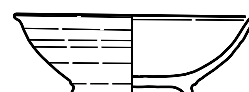
144



145



146



147



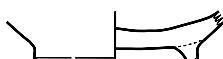
148



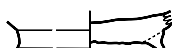
149



150



151



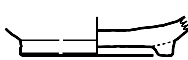
153



155

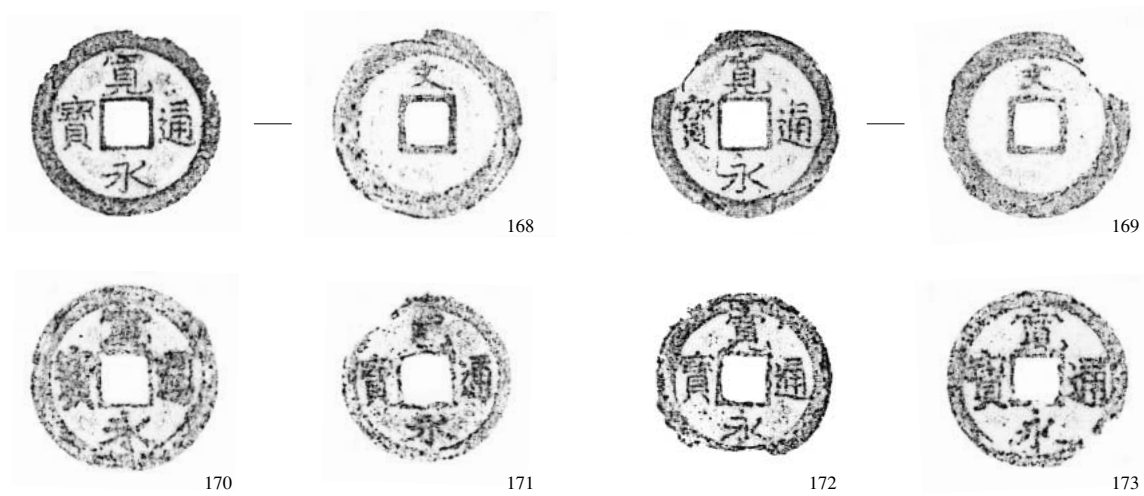
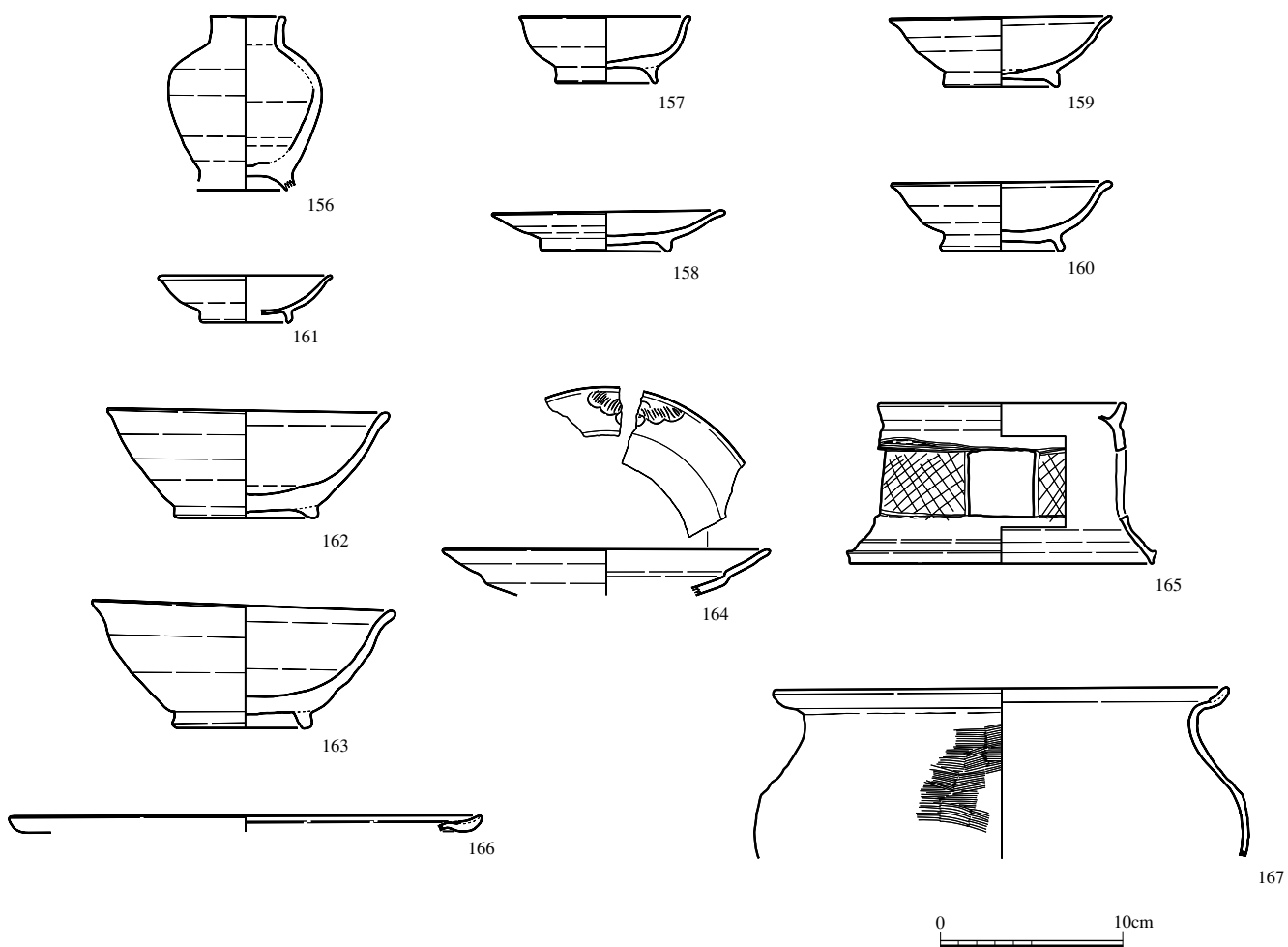


152



154

第31図 出土遺物実測図(8)



第 32 図 出土遺物実測図 (9)

第Ⅵ章 自然科学的分析

第1節 放射性炭素年代測定

山形 秀樹（パレオ・ラボ）

1. はじめに

石堂野B遺跡 S X 001 より検出された炭化材の加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を実施した。

2. 試料と方法

試料は、Ⅲ H7n S X 001 から採取した炭化材（ヒサカキ）1点である。

試料は、酸・アルカリ・酸洗浄を施して不純物を除去し、石墨(グラファイト)に調整した後、加速器質量分析計(AMS)にて測定した。測定された¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した¹⁴C濃度を用いて¹⁴C年代を算出した。

3. 結果

表1に、試料の同位体分別効果の補正值（基準値-25.0%）、同位体分別効果による測定誤差を補正した¹⁴C年代、¹⁴C年代を暦年代に較正した年代を示す。

¹⁴C年代値(yrBP)の算出は、¹⁴Cの半減期として Libby の半減期 5,568 年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差(±1σ)は、計数値の標準偏差σに基づいて算出し、標準偏差(One sigma)に相当する年代である。これは、試料の¹⁴C年代が、その¹⁴C年代誤差範囲内に入る確率が68%であることを意味する。

第2表 放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	試料データ	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	¹⁴ C年代 (yrBP±1σ)	¹⁴ C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正值	1σ 暦年代範囲
PLD-1922 (AMS)	炭化材 (ヒサカキ) Ⅲ 01D00A Ⅲ H7n SX001	-25.3	350±40	cal AD 1515 cal AD 1600 cal AD 1615	cal AD 1485-1525 (37.0%) cal AD 1560-1630 (63.0%)

なお、暦年代較正の詳細は、以下の通りである。

暦年代較正

暦年代較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い(¹⁴Cの半減期5,730±40年)を較正し、より正確な年代を求めるために、¹⁴C年代を暦年代に変換することである。具体的には、年代既知の樹木年輪の詳細な測定値を用い、さらに珊瑚の U-Th 年代と¹⁴C年代の比較、および海成堆積物中の縞状の堆積構造を用いて¹⁴C年代と暦年代の関係を調べたデータにより、較正曲線を作成し、これを用いて¹⁴C年代を暦年代に較正した年代を算出する。

¹⁴C年代を暦年代に較正した年代の算出に CALIB 4.3(CALIB 3.0 のバージョンアップ版)を使用した。

なお、暦年代較正值は ^{14}C 年代値に対応する較正曲線上の暦年代値であり、 1σ 暦年代範囲はプログラム中の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値はその 1σ 暦年代範囲の確からしさを示す確率であり、10%未満についてはその表示を省略した。 1σ 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲については、表中に影付け部分で示した。

4. 考察

試料は、同位体分別効果の補正および暦年代較正を行なった。暦年代較正した 1σ 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲に注目すると、Ⅲ H7n SX001 から採取した炭化材（ヒサカキ）の年代は cal AD 1560 - 1630 年が、より確かな年代値の範囲として示された。

引用文献

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の ^{14}C 年代、p.3-20.

Stuiver, M. and Reimer, P. J. (1993) Extended ^{14}C Database and Revised CALIB3.0 ^{14}C Age Calibration Program, Radiocarbon, 35, p.215-230.

Stuiver, M., Reimer, P.J., Bard, E., Beck, J.W., Burr, G.S., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, F.G., v.d. Plicht, J., and Spurk, M. (1998) INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, 24,000-0 cal BP, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

第2節 炭化材樹種同定

植田弥生（パレオ・ラボ）

1. はじめに

ここでは火葬墓 S X001 から人骨と共に出土した炭化材の樹種を報告する。取上げられた試料の中に炭化材は万遍なく含まれていて、大きな破片以外にも細かいものが見られ、板状・太さの異なる丸木・細い枝の密集・破片など炭化材の形状や産状は均一ではなかった。これらの炭化材が、どのような経緯で S X001 に堆積していたのかを知る参考資料として、まずいろいろな形状や産状の炭化材についてその樹種を明らかにする調査が実施された。

2. 試料と方法

取上げられていた試料から、形状や大きさの異なる炭化材や異なる樹種と思われるものを選び、樹種同定試料とした。

同定は、炭化材の横断面(木口)を手で割り実体顕微鏡で予察し、次に材の3方向(横断面・接線断面・放射断面)の断面を作成し、走査電子顕微鏡で拡大された材組織を観察した。走査電子顕微鏡用の試料は、3断面を5mm角以下の大きさに整え、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡(日本電子(株)製 JSM-T100型)で観察と写真撮影を行った。

同定した炭化材の残り破片は、愛知県埋蔵文化財調査センターに保管されている。

3. 結果

同定結果の一覧を、表 1 に示した。

検出された樹種は、常緑針葉樹のマツ属複維管束亜属・ヒノキ、常緑広葉樹のサカキ・ヒサカキ、落葉広葉樹のコナラ節・クヌギ節・クリ・ハコヤナギ属・ウツギ属・フジ、そしてタケ亜科であった。

厚みが約1.2cmあり、破片は比較的大きなものが多く、人骨が土と共に付着している破片も見られた針葉樹材の板状の炭化材は、ヒノキであった。

コナラ節とクヌギ節は放射方向で割れたやや大きな破片であり、破片数は少なく目立たなかった。

ヒサカキ・サカキ・クリ・ウツギ属・フジ・ハコヤナギ属・マツ属複維管束亜属は、直径 2cm 以下の細い枝材がほとんどで、非常の微細な枝材も多く含まれていた。試料 12 では、ウツギの周囲にサカキの細い材が多数あり、ウツギとサカキの材は同一方向に向いていた。このようにサカキまたはヒサカキと思われる散孔材の細い枝材が同一方向に固まっていたその内部または付近にウツギ属の材がある状態は、いくつか観察された。

以下に各樹種の材組織を簡単に記す。

マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylo* マツ科 図版 1 1a-1c(試料No 15)

針葉樹材で垂直と水平の樹脂道があり、分野壁孔は窓状、放射仮道管の内壁に肥厚が認められる。マツ属複維管束亜属のアカマツまたはクロマツである。

ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科 図版 1 2a-2c(試料No 16)

樹脂道はない針葉樹材で、樹脂細胞があり、晩材の量は少なく、早材部の分野壁孔の輪郭はやや斜めに細く開いたヒノキ型で 1 分野におもに 2 個が水平に整然と配列する

ハコヤナギ属 *Populus* ヤナギ科 図版 1 3a-3c(試料No 18)

小型の管孔が放射状や斜状に複合して分布する散孔材、道管の穿孔は単穿孔、放射組織は単列同性、道管との壁孔は大きく交互状に密在にする。

コナラ属コナラ亜属コナラ節 *Quercus* subgen. *Q.* sect. *Prinus* ブナ科 図版 2 4(試料No 10)

年輪の始めに大型の管孔が配列し、晩材部では薄壁で多角形の小型の管孔が火炎状・放射方向に配列する環孔材。細胞幅の広い広放射組織がある。

コナラ属コナラ亜属クヌギ節 *Q.* subgen. *Q.* sect. *Cerris* ブナ科 図版 2 5(試料No 14)

年輪の始めに大型の管孔が配列し、晩材部では厚壁で孔口が円形の小型の管孔が単独で放射方向に配列する環孔材。広放射組織がある。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 図版 2 6(試料No 4)

年輪の始めに中型～大型の管孔が密に配列し除々に径を減じてゆき、晩材では非常に小型の管孔が火炎状に配列する。集合放射組織は無く、放射組織は単列である。

ウツギ属 *Deutzia* ユキノシタ科 図版 2 7a-7c(試料No 12)

中心部の髓の面積は広い。非常に小型の管孔が均一に散在し、径の大きな細胞からなる幅の広い放射組織が特徴的な散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は横棒数が多い階段穿孔、放射組織は異性、1～3 細胞幅で背が非常に高く、放射柔細胞は大きく放射組織の縁には鞘細胞が見られる。

フジ *Wisteria floribunda* (Willd.) DC マメ科 図版 3 10a-10c(試料No 13) 11a-11b(試料No 16)

年輪の始めに中型の管孔が1～数層配列し、晩材部では非常に小型の管孔が様々な方向に集合して分布する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、小道管にらせん肥厚がある。放射組織はほぼ同性、主に1～4細胞幅、道管との壁孔は交互状である。木繊維に層階性が見られる。

サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科 図版2 8a-8c(試料No 12)

非常に小型で多角形の管孔が多数分布する散孔材。道管の壁孔は階段状、穿孔は横棒数が多い階段穿孔、内腔にほぼ水平のらせん肥厚がある。放射組織は単列異性、道管との壁孔は交互状・階段状である。

ヒサカキ *Eurya japonica* Thunb. ツバキ属 図版3 9a-9c(試料No 1)

非常に小型で多角形の管孔が散在する散孔材。道管の壁孔は交互状から階段状、穿孔は横棒数が非常に多い階段穿孔、放射組織は異性、2細胞幅の部分が多く、道管との壁孔は交互状・階段状である。

タケ亜科 *Gramineae* subfam. *Bambusoideae* イネ科 図版3 12(試料No 17)

直径1cmのやや硬質の稈である。維管束は不整中心柱で多数が同心円状に配置し、厚壁で厚い層の維管束鞘が帽子状に発達している。稈の外周に位置する維管束鞘は特に厚く、厚壁の繊維細胞だけの塊も島状に密在し、稈を強く支持していることから、当試料はタケ亜科(タケ・ササ類)のうち特に竹類と言える。

4. 考察

検出された樹種構成や各樹種の炭化材の形状や産状から、出土した炭化材は遺体を載せていた板材または棺と、火葬時の燃料材、そして葬送儀礼の供え物または構造物に使用された樹木も含まれているのではないかと考えられた。

ヒノキは棺材によく使用される樹種であり、出土状況が板状であり骨の付着も見られたことから、発掘状況からも推定されていたように、これら板状の炭化材は棺材であったと思われる。

全体的には径が細く樹皮が付いたいかにも細い枝材の炭化材が多いなかで、コナラ節とクヌギ節の破片はあまり多くなく、やや大きな破片であった。コナラ節とクヌギ節は集落周辺の林に普通の樹木であり、燃料材としてもよく知られた樹種であることから、火葬の燃料材であったと推定される。コナラ節とクヌギ節の破片は意外と少なかったことから、火葬場所と埋葬地が異なっている事を反映していると思われる。マツ属複維管束亜属とクリも燃料材としてよく利用される樹種であり、現在は重油を使用しているがそれ以前は周辺の里山のマツやクリを主に使用していたと聞く。マツ属複維管束亜属とクリは細い枝が検出されただけであるが、太い幹材ばかりではなく枝先も一緒にくべられた様子が連想される。

試料12では、ウツギの周囲にサカキの細い材が多数あり、ウツギとサカキの材は同一方向に向いていた。このように同一方向に細い枝材が固まっていた状態はいくつかの固まりが観察され、試料13の塊からは縛る用途に使用されるフジが検出されたことから、意図的に束ねられていた可能性も推測される。また、細い枝材の散孔材が多く見られ抽出して確認したところ、その多くはヒサカキであり、試料8のヒサカキは分枝が多数密集している小枝の塊状であった、サカキ・ヒサカキ・ウツギ属は小低木であり、燃料材には熱高率が悪く不向きである。サカキとヒサカキは光沢のある緑色の葉を1年中茂らす

常緑樹で、神事や仏事の様々な行事に欠かせない、いわゆる栄木(さかき)である。この栄木は、植物学的な呼称のサカキに限らず、常緑のヒサカキやシキミ・ユズリハ・マサキ・オガタマノキ・カナメモチなども含まれるようで、神性の樹とされ、ヒサカキもサカキの代用として多く用いられるそうである(足田、1985)。また、サカキは神事に、シキミは仏事に主として用いられるそうである。また湯浅(1993)によると、ウツギと総称される植物は、骨拾いの箸や、死者の杖として納棺したり、出棺時の門を作るのに使用されるなどの民俗例があるため、忌み植物として扱われる側面があるのだそうである。当火葬墓から検出されたウツギ属も、このような民俗学的な意味付けを背景に、葬送時に手向けられたものと思われる。またタケ亜科(竹類)が試料 17 から検出されたが、火葬墓からは竹類が比較的よく検出される事例を目にする。竹も葬送儀礼の施設や飾りなどの部分で使用されていたと思われる。

なお火葬墓の試料No 1 を用いて放射性炭素年代測定が実施されているが、その結果は室町時代後半から江戸時代初期の年代値であった(別報参照)。

引用文献

足田輝一、1985、『樹の文化誌』、朝日新聞社。

湯浅浩史、1993、『植物と行事 その由来を推理する』、朝日選書 478 朝日新聞社。

第3表 S X 001 出土炭化材の樹種

試料No	樹種	備考
1	ヒサカキ	年代測定試料 PLD-1922 推定直径 2cm
2	ヒサカキ	直径1cm 丸木
3	ヒサカキ	直径1.3cm 丸木
4	クリ	直径0.7cmほどで樹皮付きの 細い枝材が多い
5	散孔材	直径0.5cm 丸木
6	サカキ	直径0.5cm 丸木
7	ヒサカキ	直径1.3cm 丸木
8	ヒサカキ	多数分岐している細い枝材
9	ヒノキ	厚さ約1.2cm 板状骨破片付着
10	コナラ節	放射径3.7cm 34年輪数あり
11	フジ	直径1.5cm
	サカキ	直径2mmほどの細い枝が
12		同一方向に集まる
	ウツギ属	直径7mm サカキの束の中心にあり
	クリ	細い枝材
13	ウツギ属	直径1.3cm 丸木
	フジ	直径0.7cm ツル性
14	クヌギ節	放射径2cmの破片
15	マツ属複雑管束亜属	直径0.5cm 丸木
16	フジ	破片
17	クリ	直径0.8cm 樹皮付き
	タケ亜科	直径1cm
18	ハコヤナギ属	直径1.5cm
19	ヒサカキ	直径2cm



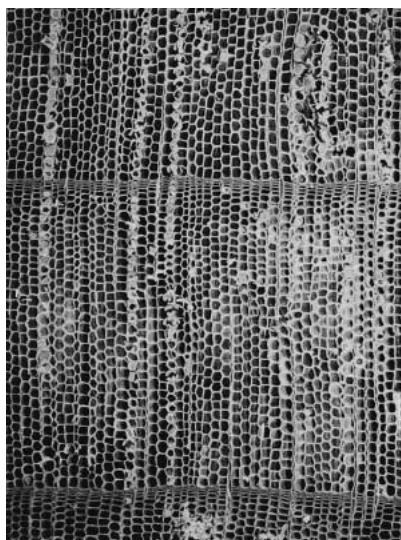
1a マツ属複維管束亜属 (横断面)
試料No 15 bar : 0.5 mm



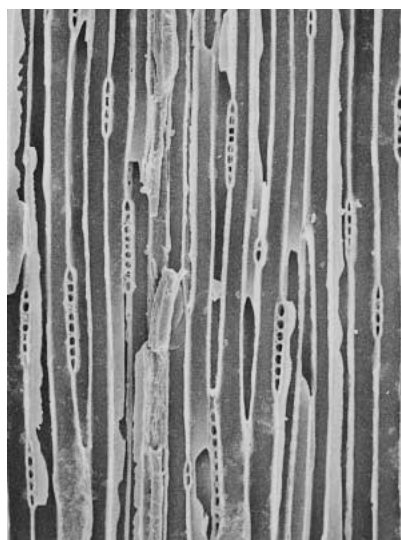
1b マツ属複維管束亜属 (接線断面)
試料No 15 bar : 0.1 mm



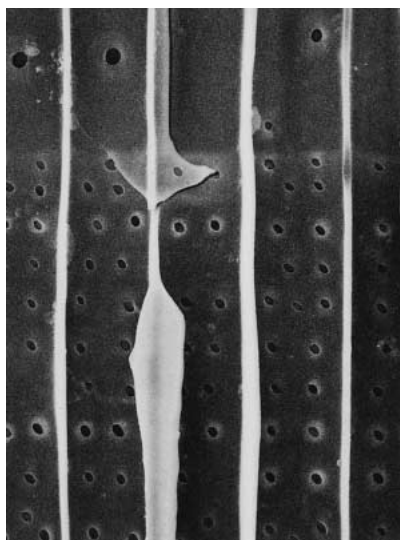
1c マツ属複維管束亜属 (放射断面)
試料No 15 bar : 0.1 mm



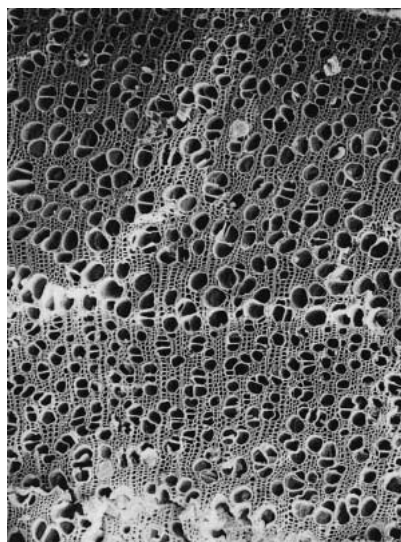
2a ヒノキ (横断面)
試料No 16 bar : 0.5 mm



2b ヒノキ (接線断面)
試料No 16 bar : 0.1 mm



2c ヒノキ (放射断面)
試料No 16 bar : 0.05 mm



3a ハコヤナギ属 (横断面)
試料No 18 bar : 0.5 mm



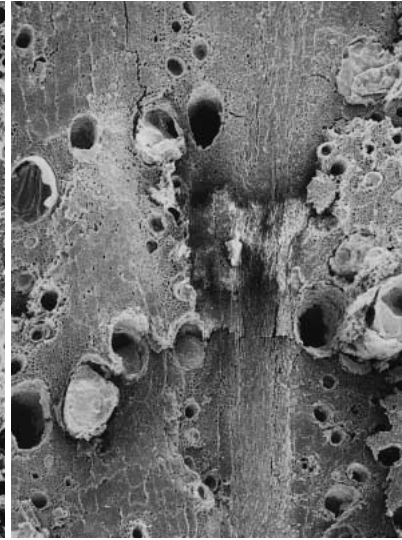
3b ハコヤナギ属 (接線断面)
試料No 18 bar : 0.1 mm



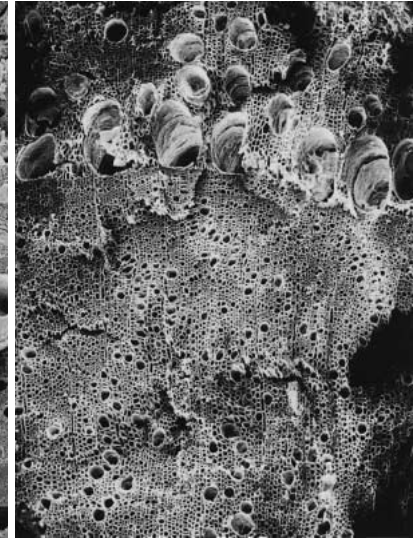
3c ハコヤナギ属 (放射断面)
試料No 18 bar : 0.1 mm



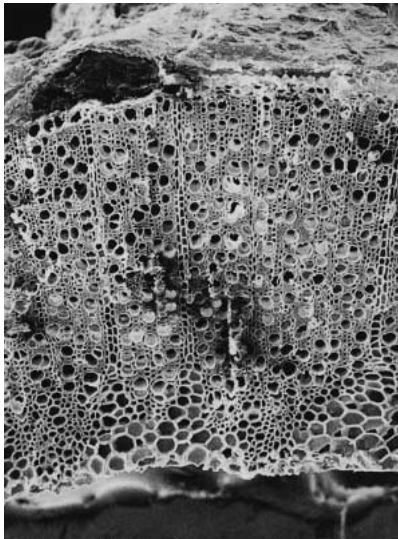
4 コナラ節 (横断面)
試料No 10 bar : 0.5 mm



5 クスギ節 (横断面)
試料No 14 bar : 0.5 mm



6 クリ (横断面)
試料No 4 bar : 0.5 mm



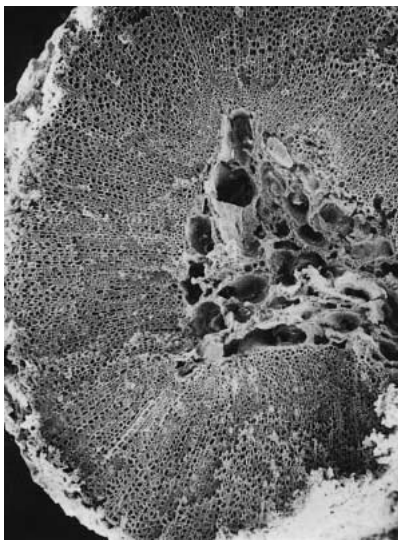
7a ウツギ属 (横断面)
試料No 12 bar : 0.5 mm



7b ウツギ属 (接線断面)
試料No 12 bar : 0.1 mm



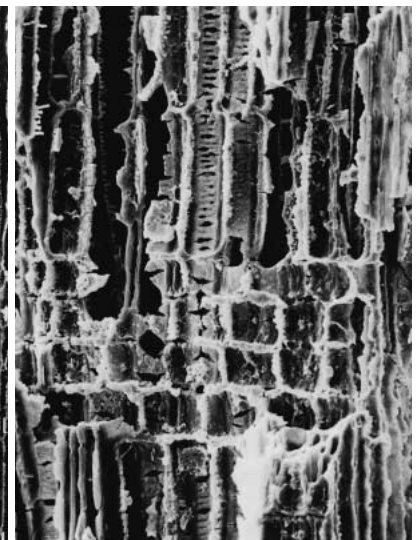
7c ウツギ属 (放射断面)
試料No 12 bar : 0.1 mm



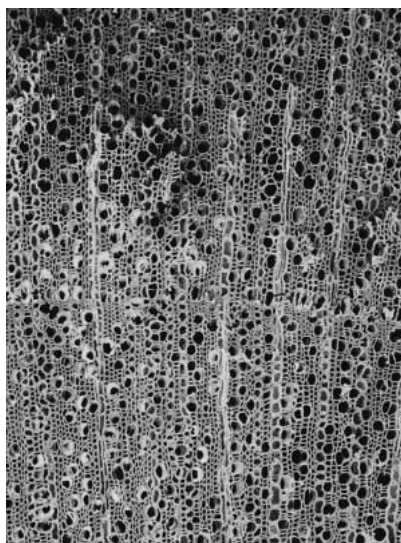
8a サカキ (横断面)
試料No 12 bar : 1.0 mm



8b サカキ (接線断面)
試料No 12 bar : 0.1 mm



8c サカキ (放射断面)
試料No 12 bar : 0.1 mm



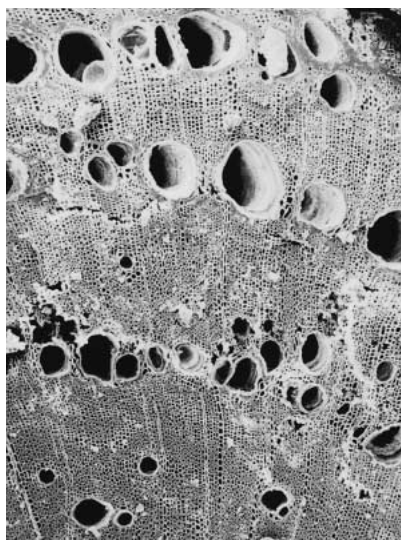
9a ヒサカキ (横断面)
試料No 1 bar : 0.5 mm



9b ヒサカキ (接線断面)
試料No 1 bar : 0.1 mm



9c ヒサカキ (放射断面)
試料No 1 bar : 0.1 mm



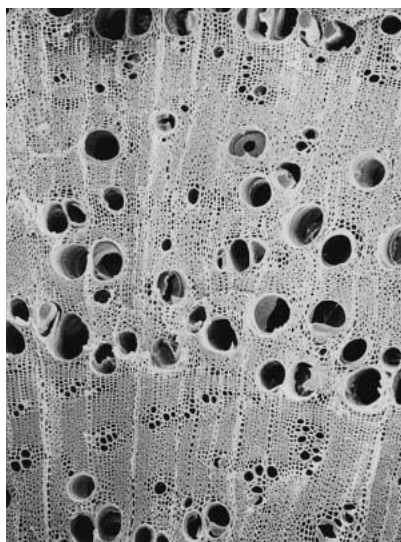
10a フジ (横断面)
試料No 13 bar : 0.5 mm



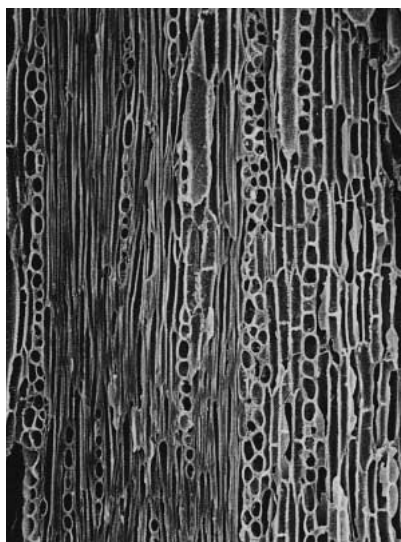
10b フジ (接線断面)
試料No 13 bar : 0.1 mm



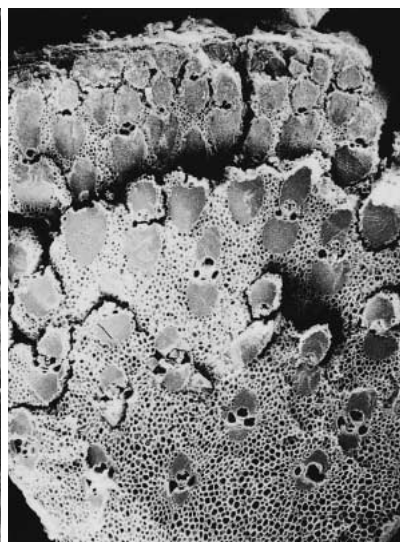
10c フジ (放射断面)
試料No 13 bar : 0.1 mm



11a フジ (横断面)
試料No 16 bar : 0.5 mm



11b フジ (接線断面)
試料No 16 bar : 0.1 mm



12 タケ亜科 (横断面)
試料No 17 bar : 1.0 mm

第Ⅶ章 まとめ

今回の調査では、遺物の一括性が認められた遺構は限られた。しかし、少ないながらもこの地点には、弥生時代末～古墳時代初頭、古墳時代後期、平安時代、中～近世の古代の人々の足跡として、遺構、遺物が検出できた。こうした検出資料の中では、平安時代・中～近世については情報量が少ないため、遺構の性格、空間的な特質について言及できるレベルではなかった。弥生時代末～古墳時代初頭・古墳時代後期については、これまでの周辺の調査成果などと照合することである程度の推測が可能であった。

ここでは、各時期の検出遺構の中で、比較的遺物がまとまって出土したものを選定し、当該期にどのような目的をもってつくられたのかを考え、出土遺物からはどのような状況が推察できるかについて記してみたい。

弥生時代末～古墳時代初頭の遺構は、今回の調査の中で他の検出できた時期と比較して、最も検討が可能な材料がみられた。

A区S B 004、B区S B 801・802といった竪穴住居跡と思われる遺構は、A・B区の境界付近に位置し、出土遺物の時期はどちらも欠山期の後半ととらえられるものであった。この時期の遺構としては、B区にてS X 819～822で構成される方形周溝墓の可能性が考えられる遺構が検出され、C区では遺構の全容は不明ながら、一括性が感じられる遺物の出土をみたS X 1001が検出される。

S B 004、S B 801・802から出土した遺物は、器種の構成も偏ることなく、被熱を受けたものもわずかであったため、焼失によって廃絶したような性格は考えられず、この地点にて比較的安定した生活が営まれ、耐用年数、消費の限界などにより廃絶した姿が想起される。この居住地点から南西に約40 mの位置に、同時期の方形周溝墓がつくられており、居住域と墓域の位置関係などを考える上での資料となるであろう。S X 1001は、居住地点から同じく南西方向に約100 mの地点、丘陵の裾部に位置する。S X 1001出土遺物は、竪穴住居、方形周溝墓から出土したものと比較して、時期的にやや新しい様相を呈する。パレススタイルを含む大小の遺存度が良好な壺3点、浅い椀形高杯などが出土しており、周囲には目立った遺構もみられないため、祭祀など特殊な目的も考えられる。

こうした調査地点の状況をふまえ、周辺に目を向けると、同一の舌状台地で北北西約300 mの位置にある石堂野遺跡では、主体ではないものの同時期の住居跡が検出されており、石堂野・石堂野B遺跡両調査地点ともに、住環境が成立する空間であったことがうかがえる。さらに、浅い谷をはさんで北東約300 mの位置に所在する高坂遺跡においても、同時期の住居跡が確認されている。したがって当該期のこのエリアは、住環境として適していたと判断してもよいであろう。さらに、今回の調査地点では中規模の方形周溝墓も検出されていることから、墓域を擁する一定の集団が、密集せずに集団生活を営んだエリアととらえることもできよう。

古墳時代後期の遺構では、出土遺物が少ないながらA区の北側角に、竪穴住居の可能性が考えられる

S B 002・S X 009などが位置し、B区の方形周溝墓の北東に古墳の周溝の可能性も考えられるS D 801・S X 801が位置し、方形周溝墓の南側には円筒埴輪片が出土したS D 805・S X 816が検出された。

S D 805・S X 816は円筒埴輪片が出土しながらも、浅く幅も狭いことから脆弱な規模を呈し、墓域と直接結びつけるにはやや無理がある。ただし、周辺に目を向けると、調査地点から北西方向に約500 m登った地点には、全長16 mの円墳（穴観音古墳）、南東方向に約700 m下った地点には、全長約37 mの前方後円墳（船山古墳）が存在するため、調査地点も含めた舌状台地上は、当該期の墓域であった可能性は充分考えられる。

平安時代、中～近世の遺構では、遺構の規模が小さいもの、遺物を伴わないものなど、観察される情報が乏しく、判断できるものが限られた。この中で、掘立柱建物跡の可能性のあるA区のS B 005・006は、やや距離をとりながらも方向・規模を同じくして並立しており、同時併存していたとするならば何らかの計画性が感じられるものである。また、緑釉陶器、円面硯、仏具の組み合わせが考えられる灰釉陶器などの出土をみたことは、一般的な集落とは違った性格の場所であったことも想起され、さらなる周辺資料の追加が待たれる。

時期はやや先行するが、参考までに記しておく、北北西約300 mの位置にある石堂野遺跡では、8世紀中～後葉の竪穴住居跡が検出遺構の主体を成しており、それぞれの住居跡の位置関係は弧状を呈している。

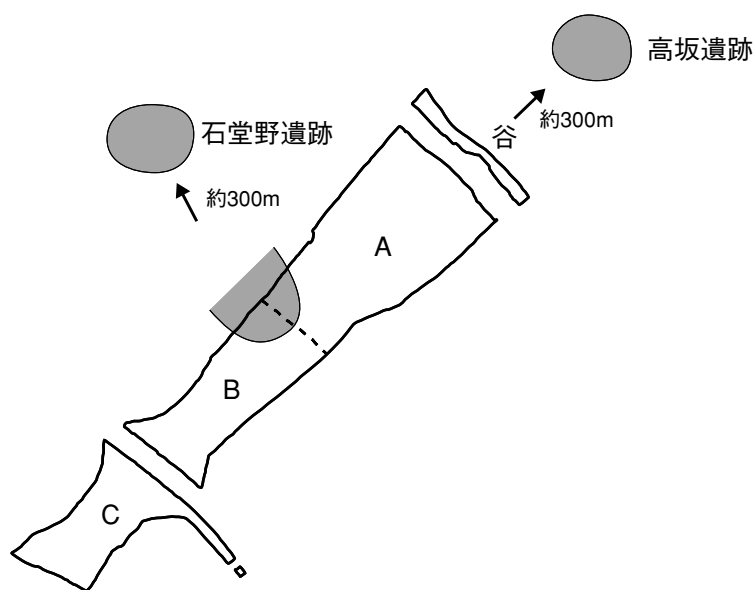
A区のS X 001は焼土、炭化材、人骨片が確認でき、火葬墓と考えられるものである。この遺構内の炭化材を試料として行った放射性炭素年代測定の結果では、本遺構の暦年代は1560－1630という年代値が出ている。炭化材の樹種同定からは、それぞれ使用目的の異なるものが見いだされている。遺体を乗せていた板材または棺材、火葬時の燃料材、葬送儀礼に伴う樹種と想定できるものが検出された。板材、または棺材としてはヒノキが骨の付着した板状に検出された。やや大きな炭化材の破片としてはコナラ節とクヌギ節が、細い破片としてはマツ属とクリが検出されており、薪と焚きつけといった燃焼時の使用が想起される。ウツギの周囲には細かいサカキが、束状に同一方向で固まっていたことがわかり、縛る用途に使用されたフジも検出された。サカキ・ヒサカキ・シキミといった常緑の低木は、燃料材とは考えにくく、葬送儀礼に伴う使用も想定できよう。当該期における火葬の実態を解明する上で、興味深い。

本遺跡の調査において確認できた遺構、遺物は、当地域における各時代の人々の足跡を考えると、有効な資料となるであろう。さらに、検出された各時期の資料は、この地域における今後の歴史解明において有効であり、さらなる資料の増加がのぞまれるところである。

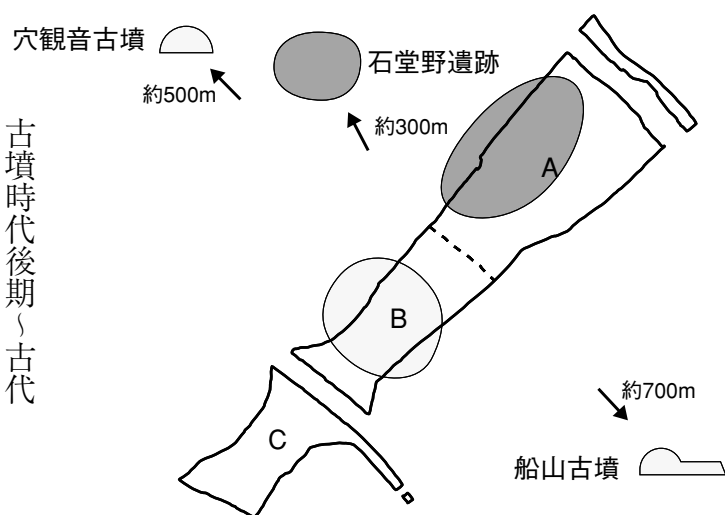
参考文献

宮腰健司編 1987 『石堂野遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター

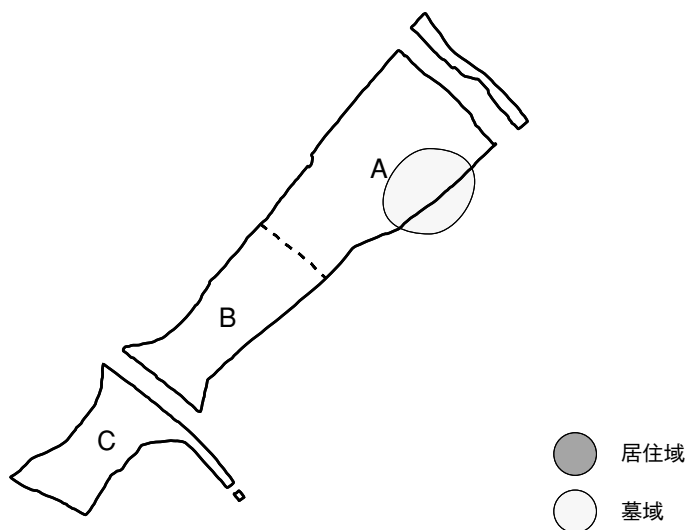
弥生時代末～古墳時代初頭



古墳時代後期～古代



近世



第 36 図 変遷概念図

図 版

図版目次

図版 1

- (1) A区全景（北東より）
- (2) A区全景（南西より）

図版 2

- (3) A区S B 004（北東より）
- (4) A区S B 002（南東より）
- (5) A区S X 009周辺（南より）
- (6) A区S K 558（西より）
- (7) A区S U 001 遺物出土状況（東より）
- (8) A区S K 685 遺物出土状況（南東より）
- (9) A区S K 090 遺物出土状況（東より）
- (10) A区S K 430 遺物出土状況（南西より）

図版 3

- (11) A区S B 005（南より）
- (12) A区S B 006（南より）
- (13) A区S B 003（南より）
- (14) A区S B 001 完掘状況（北西より）
- (15) A区S D 006 完掘状況（南より）
- (16) A区S K 067（南西より）
- (17) A区S X 001 人骨出土状況（南より）
- (18) A区壁セクション（南より）

図版 4

- (19) B・C区全景（北東より）
- (20) B区S B 801・S B 802（北東より）
- (21) B区S B 801（西より）
- (22) B区S X 821（南東より）
- (23) B区S X 819（南東より）

図版 5

- (24) B区方形周溝墓（南東より）
- (25) B区S X 822（西より）
- (26) B区S D 801 完掘状況（南西より）
- (27) B区S D 805・S X 816 遺物出土状況（西より）
- (28) C区S X 1001（南東より）

図版 6

- 遺物写真（1）

図版 7

- 遺物写真（2）

図版 8

- 遺物写真（3）



(1) A区全景（北東より）



(2) A区全景（南西より）



(3) A区 SB004 (北東より)



(4) A区 SB002 (南東より)



(5) A区 SX009 周辺 (南より)



(6) A区 SK558 (西より)



(7) A区 SU001 遺物出土状況 (東より)



(8) A区 SK685 遺物出土状況 (南東より)



(9) A区 SK090 遺物出土状況 (東より)



(10) A区 SK430 遺物出土状況 (南西より)



(11) A区 SB005 (南より)



(12) A区 SB006 (南より)



(13) A区 SB003 (南より)



(14) A区 SB001 完掘状況 (北西より)



(15) A区 SD006 完掘状況 (南より)



(16) A区 SK067 (南西より)



(17) A区 SX001 人骨出土状況 (南より)



(18) A区 壁セクション (南より)



(19) B、C区全景（北東より）



(20) B区 SB801、SB802（北東より）



(21) B区 SB801（西より）



(22) B区 SX821（南東より）



(23) B区 SX819（南東より）



(24) B区 方形周溝墓 (南東より)



(25) B区 SX822 (西より)



(26) B区 SD801 完掘状況 (南西より)



(27) B区 SD805、SX816 遺物出土状況 (西より)



(28) C区 SX001 (南東より)



遺物写真 (1)



遺物写真 (2)



遺物写真（3）

報告書抄録

ふりがな	いしどうのびーいせき
書名	石堂野 B 遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第 114 集
編著者名	松田 訓、山形秀樹・植田弥生（株式会社パレオ・ラボ）
編集機関	財団法人愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方802-24
発行年月日	西暦 2003年 8 月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いしどうの 石堂野 B	ほいぐんみとちよう 宝飯郡御津町 おおあざひろいし 大字広石	23604	—	34度 49分 31秒	137度 18分 57秒	20000508～ 20000927	6400m ²	県道大塚・ 国府線建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
石堂野 B	集落跡・ 墓域	弥生末～ 古墳初頭 古墳後期 平安時代 中～近世	竪穴住居・ 方形周溝墓 溝 土坑 住居・火葬墓 土壙墓	土器 須恵器 円筒埴輪 緑釉陶器 円面硯 灰釉陶器 銭貨	

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第114集

石堂野B遺跡

2003年8月31日

編集・発行 財団法人愛知県教育サービスセンター
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 サンメッセ株式会社